

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第142集

所 沢 市

き よ

は し

清 橋 遺 跡

国道463号(旧県道所沢入間線)関係埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 9 4

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



序

清橋遺跡の所在する所沢市周辺は、雑木林や茶畑、桑畑が広がり、静かな武蔵野の景観をとどめている地域であります。近年、都心に近いこともあり、急速に宅地化が進み、それに対応した交通網の整備が進められております。

このたび、国道463号（旧県道所沢入間線）の建設事業が実施されることになり、当地に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関が協議を重ねた結果、当事業団が発掘調査を実施し、記録保存することになりました。

発掘調査の結果、旧石器時代の石器集中箇所などが検出され、細石刃、細石核などの石器が出土しました。これらは当時の人々の生活を考える上で貴重な資料となるものです。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめた報告書であります。本書が埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行にいたるまで多大な御協力を賜りました教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、土木部道路建設課、同川越土木事務所、所沢市教育委員会、並びに地元関係者各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒 井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県所沢市北野2805番地に所在する清橋遺跡の発掘調査報告書である。
文化庁の通知は平成3年6月27日付委保第5の872号である。
遺跡名の略号はKYHである。
2. 発掘調査は国道463号（旧県道所沢入間線）の建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 発掘調査は鈴木秀雄、岡本健一が担当し、平成3年4月1日から平成3年9月30日まで実施した。整理作業は田中正夫が担当し、平成6年1月1日から平成6年2月28日まで実施した。なお、発掘調査、整理作業の組織は第I章に示した。
4. 鉱物分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
遺物の巻頭写真は折原基久氏に委託した。
5. 遺跡の基準点測量はシン航空写真株式会社に委託した。
6. 本書の執筆は、I-1を文化財保護課が、I・II・III・IV-2を岡本・田中、IV-1・Vを西井幸雄が、付編を除きその他を田中が担当した。
図版作成、写真撮影は下記の者が行った。
図版作成 田中 西井 岡本 新屋雅明
発掘調査撮影 鈴木 岡本
遺物撮影 田中 西井
7. 本書の編集は、資料部資料整理第二課の田中が行った。
8. 本書にかかる資料は、平成6年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
9. 本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。
伊藤 健 亀田直美 鈴木忠司 長崎潤一 並木 隆

目 次

序

例言

目次

I	調査の概要	1
1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	調査の組織	2
3	調査の経過	3
II	遺跡の立地と環境	4
III	遺跡の概要	6
IV	検出された遺構と遺物	10
1	先土器時代の遺構と遺物	10
2	その他の遺構と遺物	28
V	結 語	31
	付編	39

挿図目次

第1図	清橋遺跡と周辺の遺跡	1	第16図	出土石器(8)	18
第2図	周辺の地形	7	第17図	接合図(1)	19
第3図	先土器調査範囲	8	第18図	接合図(2)	20
第4図	基本土層図	8	第19図	接合図(3・4)	21
第5図	清橋遺跡全体図	9	第20図	石材別分布図	22
第6図	先土器時代遺物出土状況	10	第21図	黒耀石分布図	23
第7図	石器集中1	11	第22図	チャート母岩1分布図	24
第8図	器種組成グラフ	12	第23図	第1号溝	29
第9図	出土石器(1)	12	第24図	第2号溝	30
第10図	出土石器(2)	13	第25図	その他の遺物	30
第11図	出土石器(3)	14	第26図	細石核・細石刃	32
第12図	出土石器(4)	15	第27図	清橋遺跡	34
第13図	出土石器(5)	16	第28図	下向山遺跡	35
第14図	出土石器(6)	16	第29図	中砂遺跡	36
第15図	出土石器(7)	17	第30図	上草柳遺跡	37

写真図版目次

図版1	I区調査区全景	図版5	第1号溝全景
	II区調査区全景		第1号溝土層堆積状況
図版2	石器集中1全景(南から)	図版6	第2号溝全景
	石器集中1全景(西から)		第2号溝土層堆積状況
図版3	石器集中1尖頭器出土状況	図版7	出土石器(1)
	石器集中1石器出土状況	図版8	出土石器(2)
図版4	I区標準土層堆積状況	図版9	出土石器(3)
	II区標準土層堆積状況		

I 調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県では、多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化等を図るため体系的な道路網の整備を進めている。国道463号（旧県道所沢入間線）は、入間市に建設されている首都圏中央連絡自動車道・インターチェンジ周辺で予想される交通混雑の解消を図るため事業が進められてきた。

埼玉県教育局文化財保護課では、埋蔵文化財の保護とこのような各種道路建設事業との調整を図るため事前協議を重ねているところである。

平成2年1月11日付け道建第789号で、道路建設課長から文化財保護課長あて当該道路建設予定地における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて照会があった。この照会を受け、文化財保護課では埋蔵文化財所在確認調査を実施し、その結果に基づき平成2年2月20日付け教文第1328—1号により次の旨回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	
所沢市№123遺跡 (20-123清橋遺跡)	集落	縄文・弥生・奈良・平安	所沢市北野2805他

2 取り扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査の実施については当課と別途協議すること。

その後、文化財保護課、道路建設課で保存策について協議をもったが、計画変更は不可能と判断されたため記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査については文化財保護課、道路建設課、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団とで調査期間等について協議し、平成3年4月から平成3年9月までの予定で実施することを決定した。

調査に先立ち、埼玉県知事から、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が提出され、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法57条1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が平成3年3月30日付け財埋文第969号で提出された。

埋蔵文化財発掘調査届に対する文化庁長官の通知は、平成3年6月27日付け委保5の872号である。

(文化財保護課)

2 調査の組織

発掘調査（平成3年度）

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	荒井 修二
副理事長	早川 智明
常務理事兼管理部長	倉持 悦夫
理事兼調査部長	栗原 文藏

庶務経理

庶務課長	高田 弘義
主 査	松本 晋
主 事	長滝美智子
経理課長	関野 栄一
主 任	江田 和美
主 事	福田 昭美
主 事	腰塚 雄二
主 事	菊池 久

発 掘

調査副部長	梅沢太久夫
調査第三課長	宮崎 朝雄
主任調査員	鈴木 秀雄
調査員	岡本 健一

整理作業（平成5年度）

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	横川 好富
常務理事兼管理部長	柴崎 光生
理事兼調査部長	中島 利治

庶務経理

庶務課長	萩原 和夫
主 査	贅田 清
主 事	菊池 久
経理課長	関野 栄一
主 任	江田 和美
主 事	長滝美智子
主 事	福田 昭美
主 事	腰塚 雄二

整理作業

資料部長	小川 良祐
資料部副部長	
兼資料整理第一課長	谷井 彪
専門調査員	
兼資料整理第二課長	小久保 徹
主任調査員	田中 正夫

3 調査の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は平成3年4月1日から9月30日まで行った。調査範囲は当初、台地よりも東側のやや低い部分（Ⅰ区）のみで、台地斜面から上部にかけて（Ⅱ区）は平成4年度に調査を行う計画であった。しかしⅠ区では先土器時代の石器集中区が検出されたものの、その他の遺構等が検出されず、調査が予想以上に進展したため、Ⅱ区の調査も引き続き行うことになった。よって調査面積は当初は3,300㎡であったが、最終的には7,000㎡となった。

最初にⅠ区から掘削を開始したが、黒褐色の表土がかなり厚く堆積しており、約1.5mほど機械掘削を行って、遺構確認作業を実施した。住居や土壇などの遺構は検出されなかったが、黒耀石の碎片が出土しはじめたので、その地点を中心として試掘坑を掘削していったところ、尖頭器などの石器や剥片、碎片が集中して出土した。Ⅰ区全体にわたって一辺2.5mの試掘坑を掘削した。検出された石器集中区は1か所にとどまったが、石器・剥片・碎片等は100点以上を数えた。

その後7月にはⅡ区の調査にはいり、ローム面まで機械掘削を行って、遺構確認作業を実施した。茶畑や植木の栽培などによる攪乱が激しいこともあって、溝を1条確認した他にはまったく遺構は検出されなかった。溝は側壁に鋤などの掘削工具の痕跡がみられたことから、慎重に調査をすすめた。Ⅱ区にも一辺4mまたは3mの、先土器時代の遺物の有無を確認するため試掘坑を、調査区全体にわたって掘削していったが、石器等はまったく出土しなかった。

Ⅰ区ではプレハブ事務所駐車場の下が未調査であったため、最後に調査を行ったところ、時期不明の溝が1条検出された。調査区を埋め戻して、9月30日に調査はすべて完了した。

(2) 整理事業

整理事業は平成6年1月1日から2月28日まで行った。

1月上旬 遺物の水洗、注記および接合を行い図面整理を開始する。

中旬 遺物の実測を開始する。

下旬 遺物、遺構トレースを開始する。

2月上旬 遺物、遺構トレースを終了、版下作成を開始する。

中旬 遺物写真撮影、遺構写真選択を行い、資料収集および原稿執筆、割り付けを行う。

編集を終了し、報告書を刊行する。

II 遺跡の立地と環境

清橋遺跡は所沢市北野2805番地に位置する。所沢市街からは3～4 km西へ隔たっており、周辺には茶畑や桑畑、雑木林が広がる静かなところである。しかし都心から1時間前後という交通至便な環境から、近年急速に宅地化が進行しており、周辺の景観は日毎に変貌しつつある。

狭山丘陵は武蔵野台地の中央やや北側にあり、現在では狭山湖や多摩湖が存在し、埼玉県と東京都の境界に位置している。遺跡はその狭山丘陵から北に派生するなだらかな台地上に立地し、南側は現在の砂川堀によって開析された谷に面している。砂川堀は所沢市堀ノ内「堂入の池」を水源とし、北東へ向かって流れていくが、かつては次第に細くなって伏流水となるいわゆる「尻無川」であり、遺跡の南側では今でも普段は水量が非常に少ない。しかし大雨などの後には水量はかなり増し、調査時にも溢れそうになったことが数度あった。

周辺の遺跡のうち、先土器時代のものを中心に概観する。武蔵野台地上では小河川の流域を中心として多くの先土器時代の遺跡が検出されているが、狭山丘陵付近でも当遺跡から砂川堀を約1 km遡ったところの右岸に、学史的にも名高い砂川遺跡がある。2回の調査によって、6か所のブロックを検出し、全部で769点の石器・剥片類などが出土している。この中でいわゆる「砂川型刃器技法」と言われる剥片剥離技術が認定されたほか、石器の接合・復元などによって、集団の構造的な研究にまで及んだ、画期的な調査であった。

また当遺跡から砂川堀を約500m 下った右岸には中砂遺跡が存在する。この遺跡は県立所沢西高校グラウンド拡張事業によって行われた調査で、石器集中24か所、礫群39か所が検出された。

砂川堀の水源の近くには、お伊勢山遺跡と宮林遺跡がある。お伊勢山遺跡では大形の局部磨製石斧や礫器から有舌尖頭器にいたる多くの石器が出土した。宮林遺跡ではナイフ形石器を中心とする砂川期の石器ブロックが検出された。これらの成果はすでに詳細な報告書として刊行されている。

その他、日向遺跡ではブロックなどは確認されなかったが、ナイフ形石器や尖頭器などを含む遺物が約50点出土し、白旗塚遺跡では5か所のブロックが検出され、ナイフ形石器をはじめとする石器が出土している。また場北遺跡や後内手遺跡、山下後遺跡などでもナイフ形石器などの遺物が出土している。

このように狭山丘陵の北側の台地上にも、多くの先土器時代の遺跡が知られるようになり、今後調査例が増加することは予想される。



- | | |
|----------|---------|
| 1 清橋遺跡 | 6 砂川遺跡 |
| 2 比良遺跡 | 7 西内寺遺跡 |
| 3 宮林遺跡 | 8 白旗塚遺跡 |
| 4 お伊勢山遺跡 | 9 中砂遺跡 |
| 5 日向遺跡 | 10 膳棚遺跡 |

第1図 清橋遺跡と周辺の遺跡

III 遺跡の概要

清橋遺跡の調査は、便宜上市道をはさんで東側をⅠ区、西側をⅡ区と呼称する。

Ⅰ区は砂川堀によって黒褐色系の土が約1.5～2.0mほど堆積していた。埋没土の下にはローム面があり、全体的に起伏が少なく平坦に近い。表土上では土師器の破片がわずかに採集されていたが、それに伴う遺構は検出されなかった。しかしロームを掘り下げたところ先土器時代の石器集中地点を1か所検出し、尖頭器1点、細石核と細石刃が数点、黒耀石やチャートの剥片が約100点ほど出土した。またⅠ区の西端付近、台地斜面に向かう傾斜変換地点にあたるところで、南西から北東にのびる時期不明の溝（2号溝）が検出された。

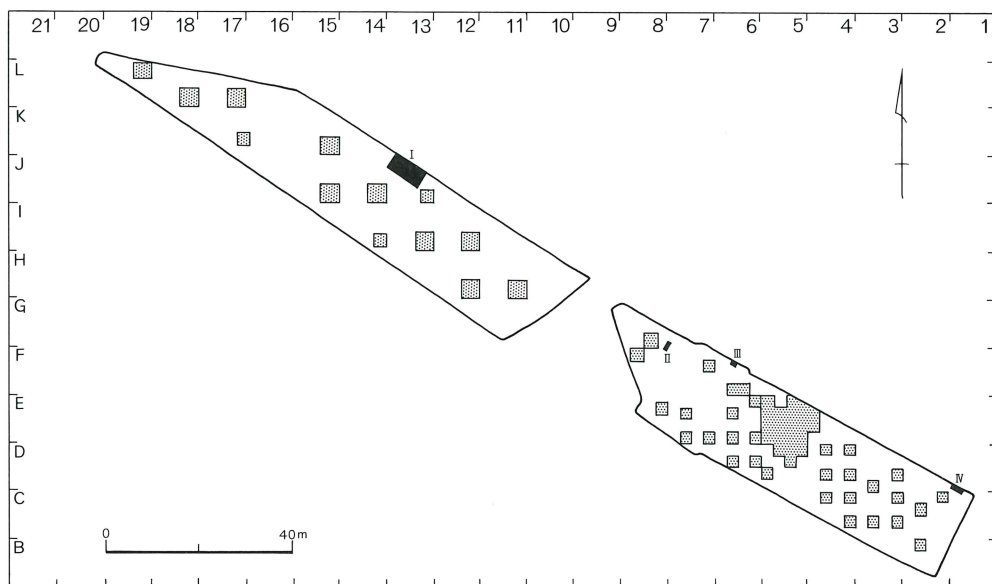
Ⅱ区は東へのびる台地の南斜面から平坦部にあたる。遺構は南北方向の時期不明の溝（1号溝）が1条検出され、遺物は溝覆土の中から縄文土器片や打製石斧1点が出土した。Ⅰ区のように先土器時代の遺構や遺物はまったく検出されなかった。

以上のように今回の調査では先土器時代以降の遺構はほとんど検出されなかったが、縄文土器片や石器、土師器の破片がわずかながらも採集されることから、近辺にそれらの時代の遺構が存在する可能性がある。

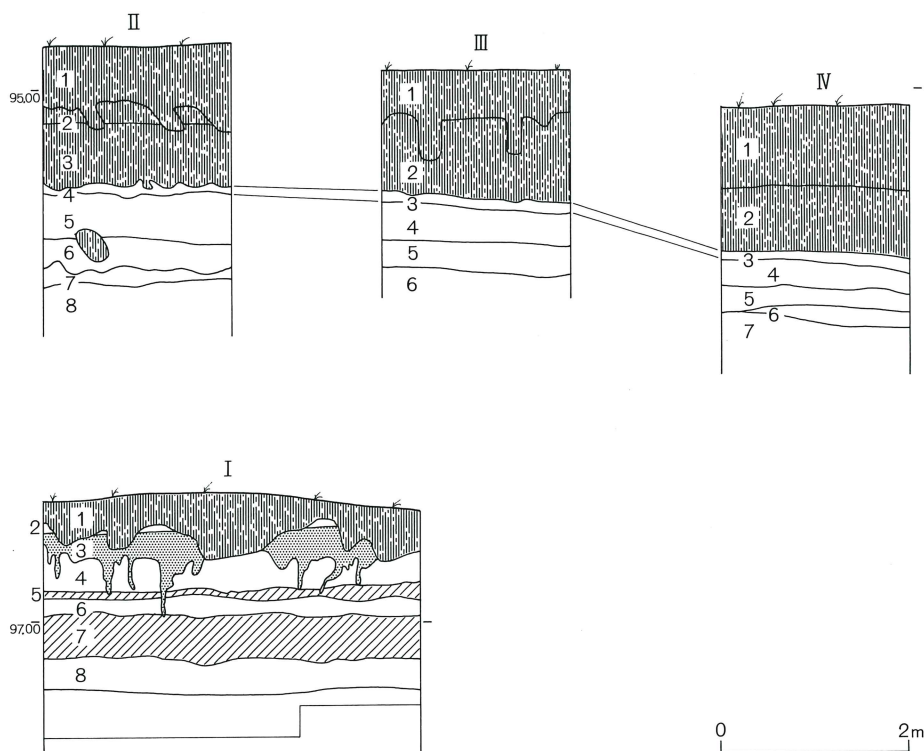




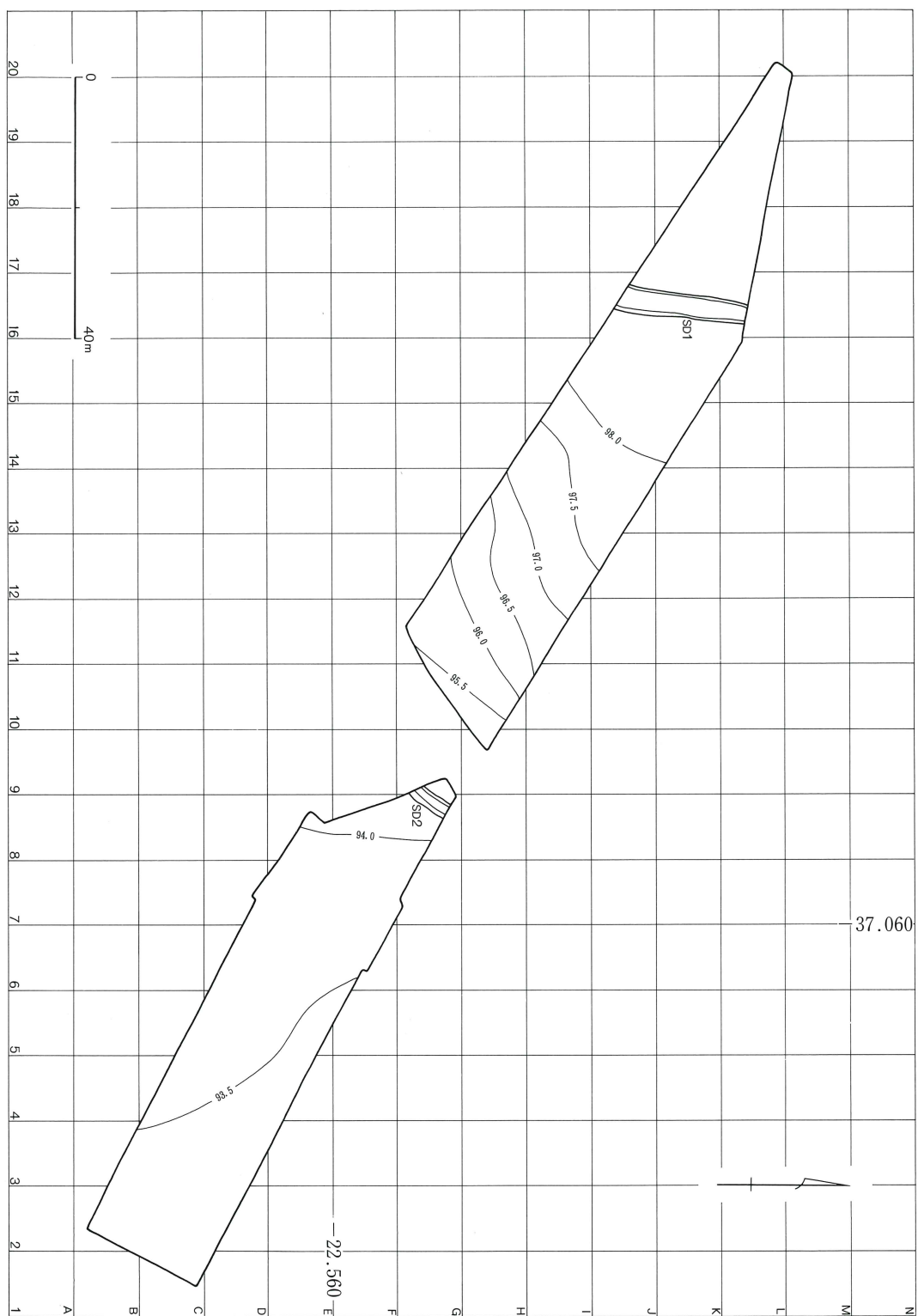
第2図 周辺の地形



第3図 先土器調査範囲



第4図 基本土層図



第5図 清橋遺跡全体図

IV 検出された遺構と遺物

1 先土器時代の遺構と遺物

概観

清橋遺跡では先土器時代の石器集中が1か所、砂川堀左岸の台地から降りてすぐの低地部より検出されている。出土地点からプライマリーな状態であるのか疑問もあったが、石器は集中部以外から検出されておらず、限定された範囲より接合等の関係がみられ、原位置を保っていることは明らかである。

基本層位（第4図）

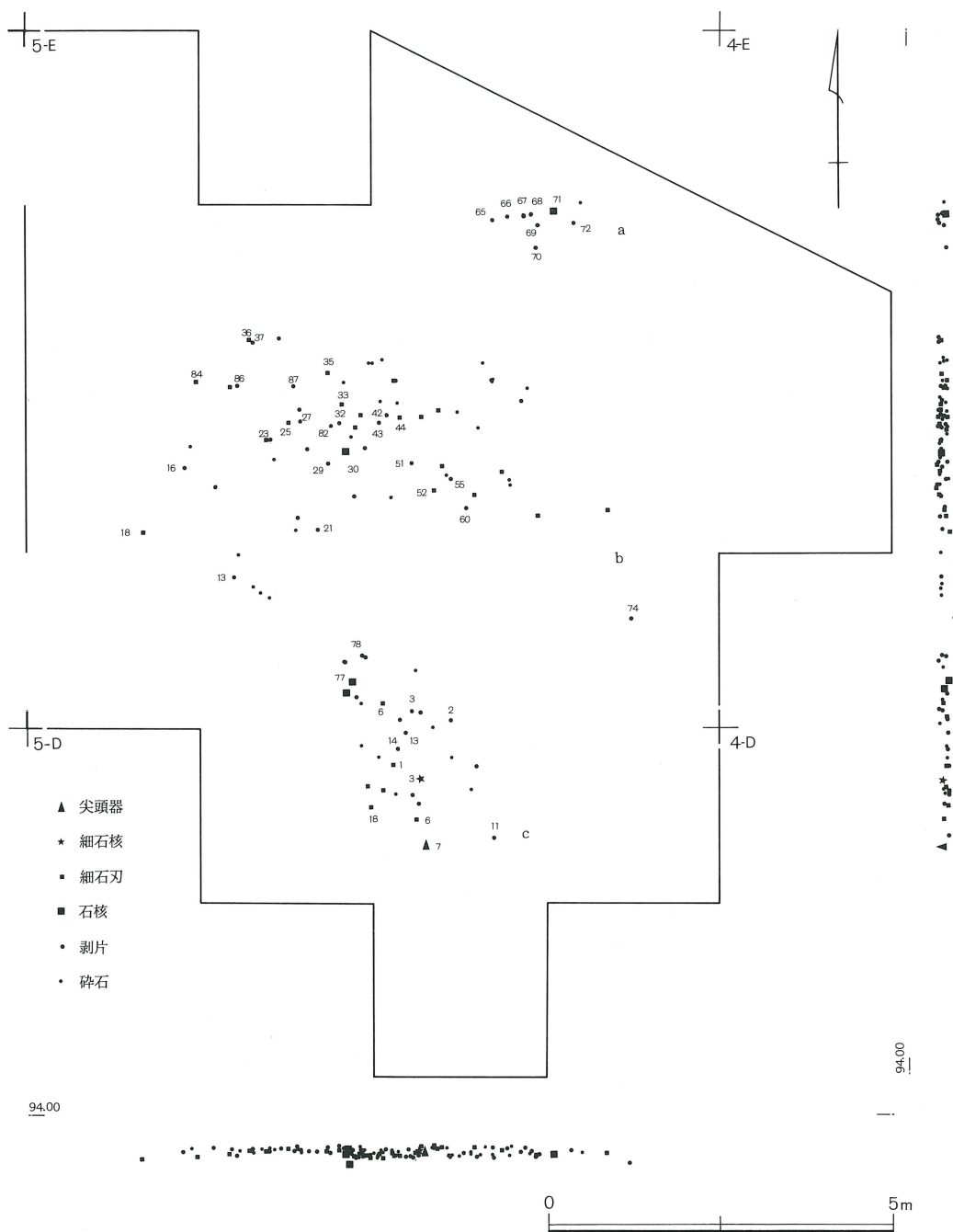
台地部（I）は武蔵野台地の層位区分と変わらない。低地部（II）の層位は第1～3層は黒色土と暗褐色土、第4層は漸移層、第5層は暗黄褐色土、第6層は明黄褐色土、第8層は砂層である。遺物は第4層から出土している。

石器集中1（第7図）

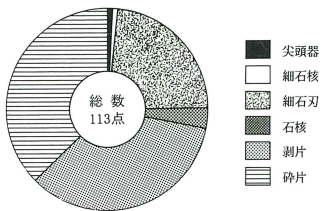
石器集中はE-5グリッドとD-5グリッドの境に位置する。遺物は南北9.5m、東西7.5mと広い範囲に分布し、その中をさらに3つの小さなかたまり（クラスター^{註1}）に区分することができる。このかたまりを北からクラスターa～cとした。



第6図 先土器時代遺物出土状況



第7図 石器集中I



第8図 器種組成グラフ

石器の総数は113点で器種の内訳は尖頭器1点、細石核1点、細石刃26点、石核4点、剥片39点、碎片42点である。石材は黒耀石とチャートが主体を成し安山岩が若干含まれる。

次に各クラスターをみると

クラスターaは北東に位置し、石器の総数が9点と少ない。接合資料(1)と(2)がみられ、石材は安山岩1点を除くと全てチャートで黒耀石を含まない。

クラスターbは分布の中央に位置し、範囲は南北7.0m、東西4.0mと横長の楕円形に分布している。石器の総数は72点である。石器はE 5-30のチャートの石核と細石刃がみられる。

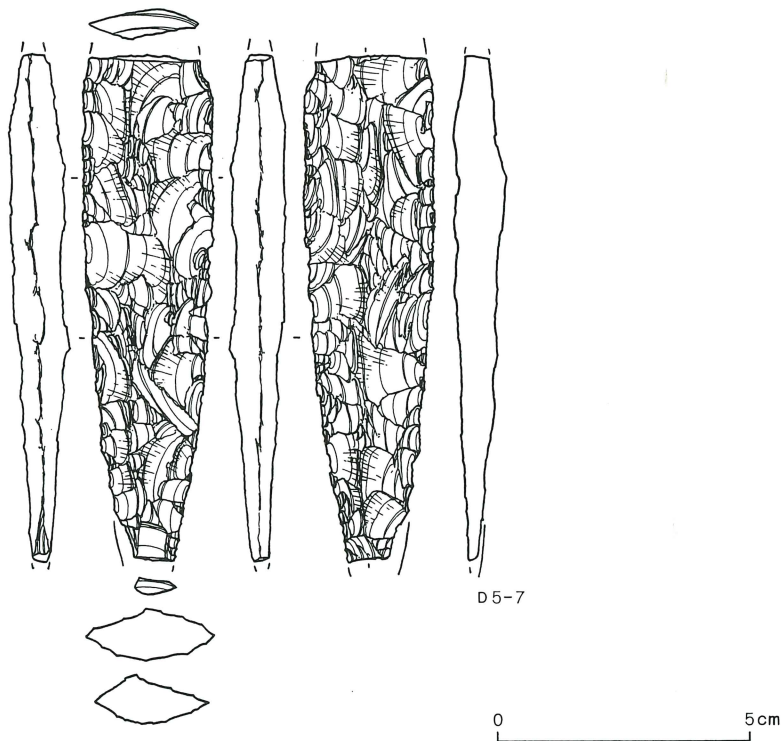
クラスターcは分布の南側に位置し、範囲は南北2.5m、東西3.0mと南北に長い楕円形をしている。本クラスターから尖頭器、細石刃、打面再生剥片等と細石刃が多く出土している。

石器（第9～16図）

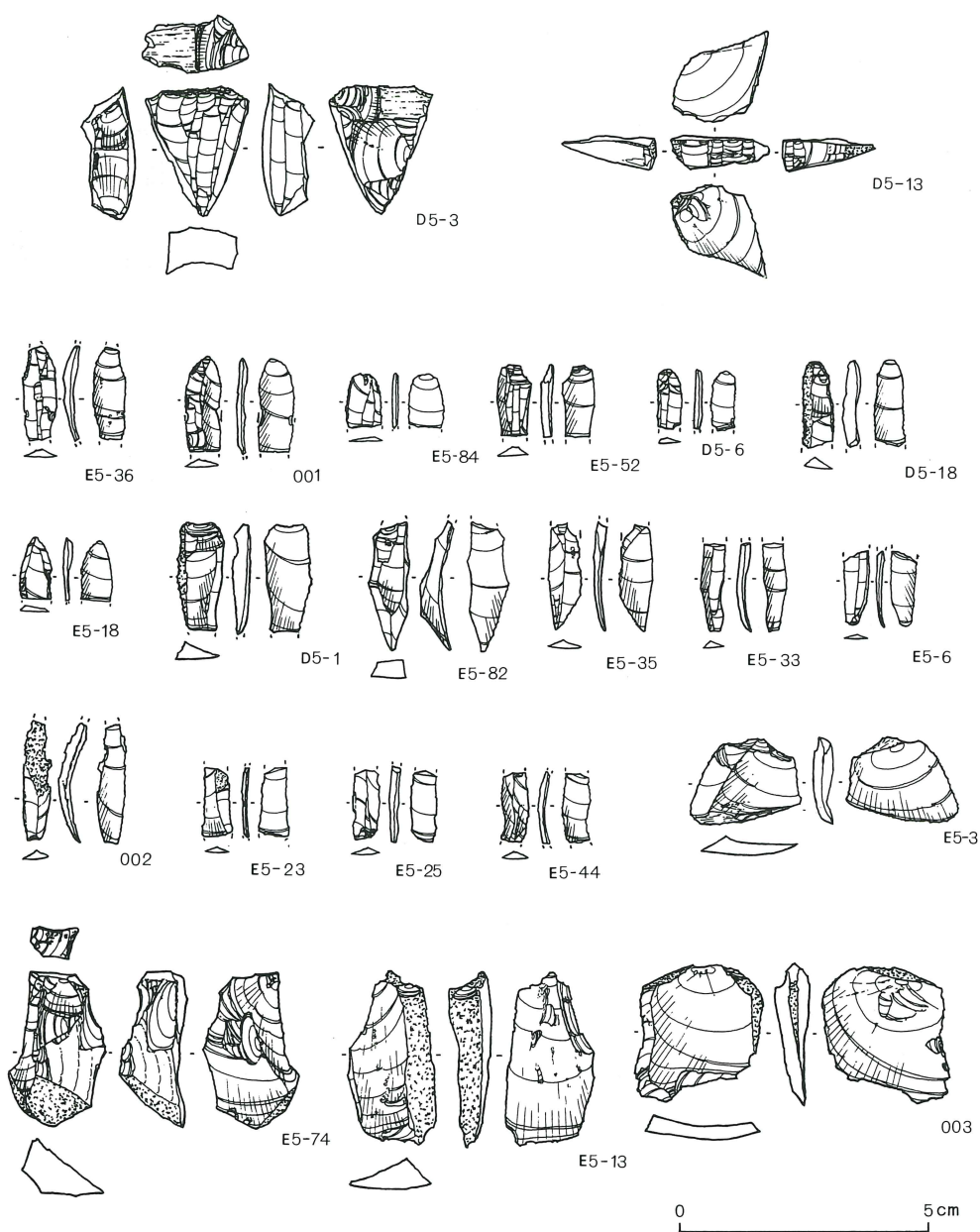
尖頭器（第9図）

D 5-7 先端及び基端を欠損するため外形は不明な点もあるが、最大幅が基部中程からやや上半部に位置する細身のいわゆる柳葉形の尖頭器である。

調整加工が両面に入念に施されているため、素材の状況はつかめない。



第9図 出土石器(1)



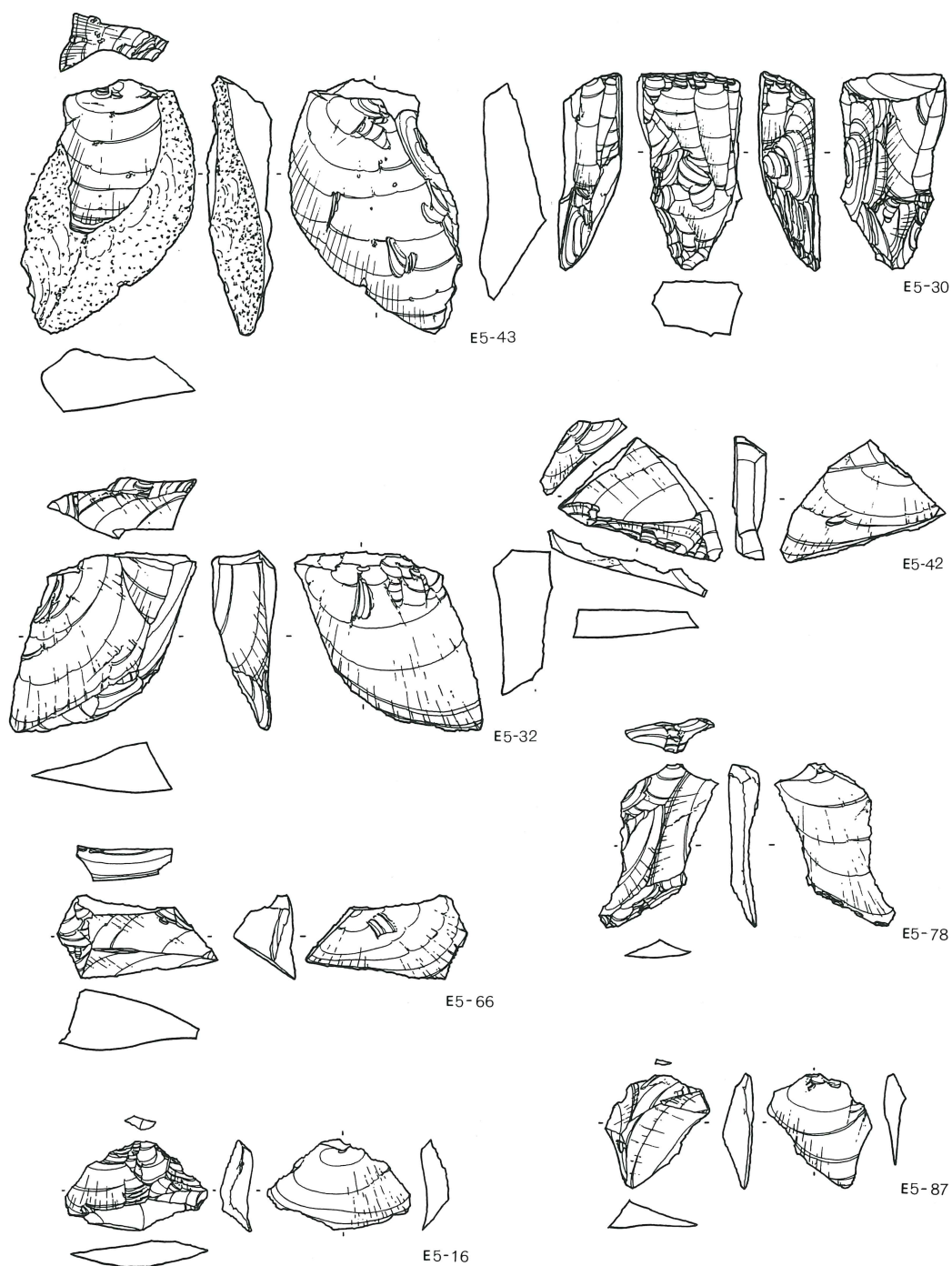
第10図 出土石器(2)

細石核 (第10図)

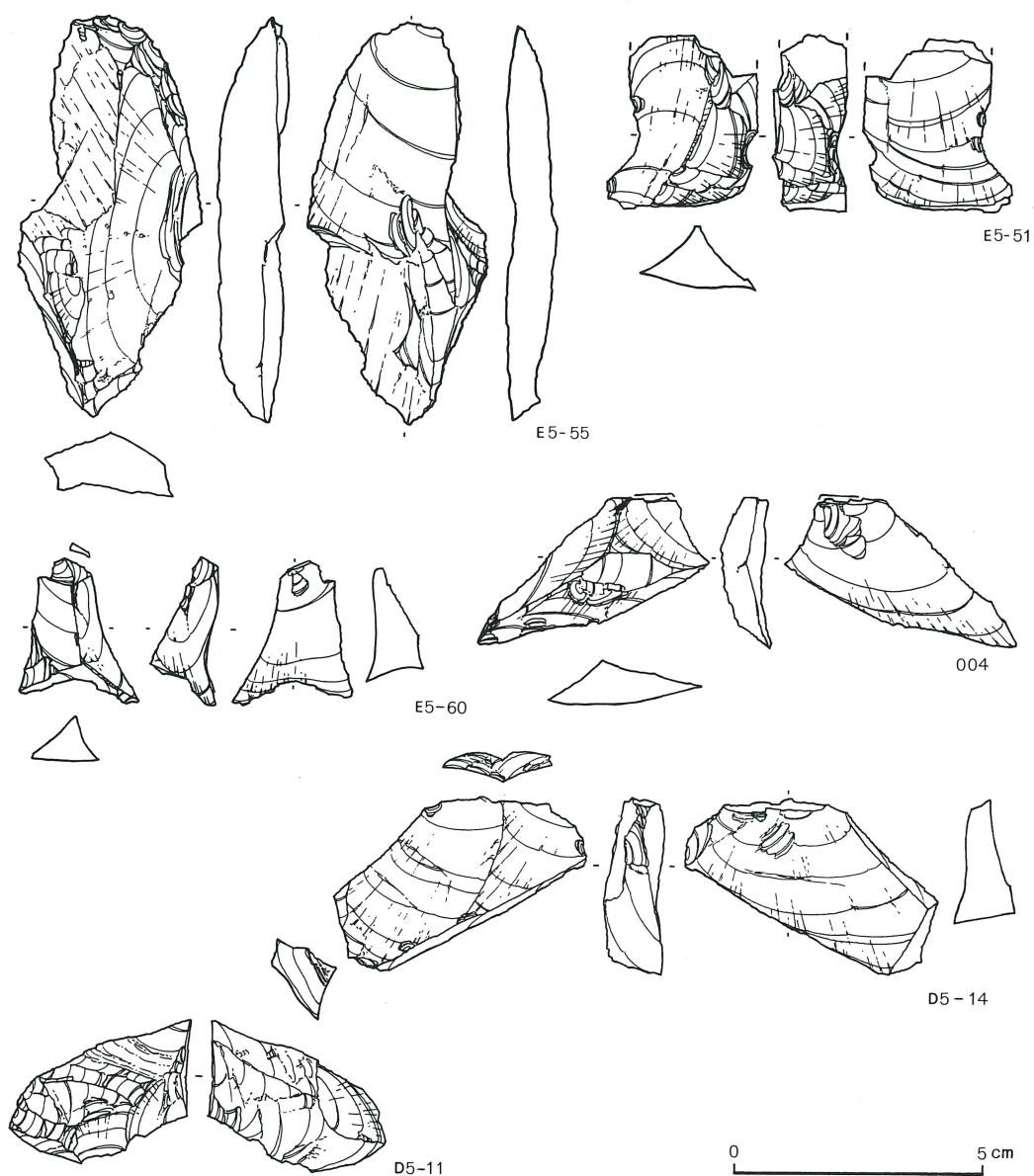
D 5 - 3 外形は正面は逆三角形、打面は横長、側面は縦長の方形をしている。打面と裏面の一部に原石面を残置しており、小形の角礫を素材としていたことが伺える。

細石刃の剥片剥離は正面に約 5 枚の縦長剥離面、右側面に 2 枚の縦長剥離面がみられる。主に正面を作業面とし、右側面からも細石刃を剥離していた可能性が高い。打面は原石面の平坦面をそのまま利用している。打面の右側にみられる剥離面は、右側面の縦長剥離面の打点を切っている。

裏面の加工は粗く両側縁から平坦剥離が施されている。



第11図 出土石器(3)

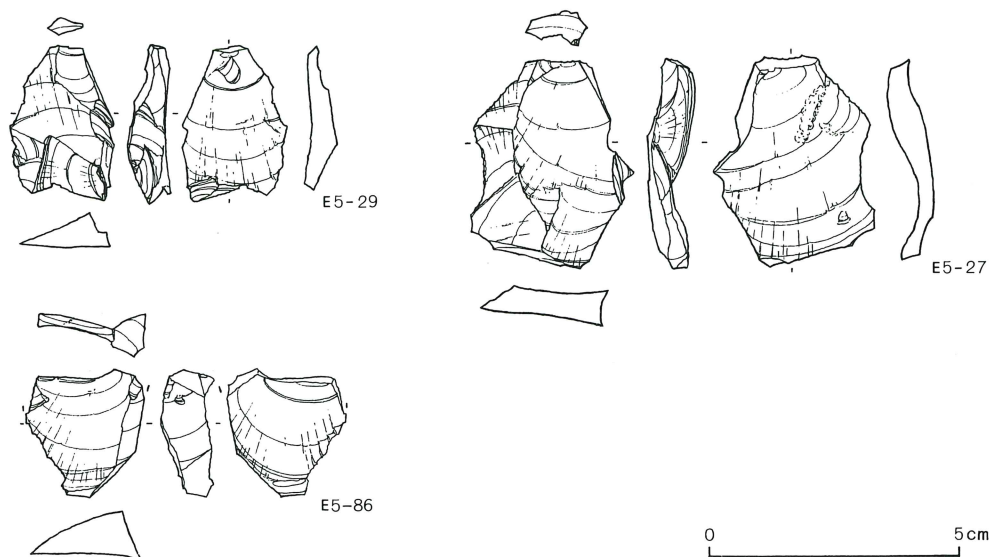


第12図 出土石器(4)

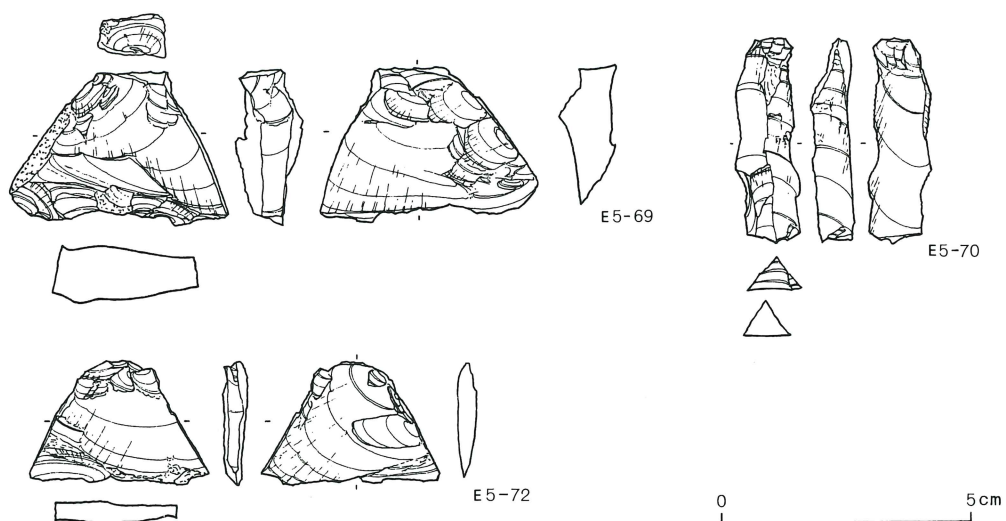
打面再生剥片 (第10図)

D 5-13正面から右側面にかけて上面を打面とし主要剥離面に向かう数枚の剥離面がみられる。剥離面は主要剥離面によって全て切られている。また、左側面と右側面の一部に原石面を残している。打面は1枚の剥離面で平坦になっている。

正面剥離面の状況から細石刃の打面再生剥片と思われる。



第13図 出土石器(5)



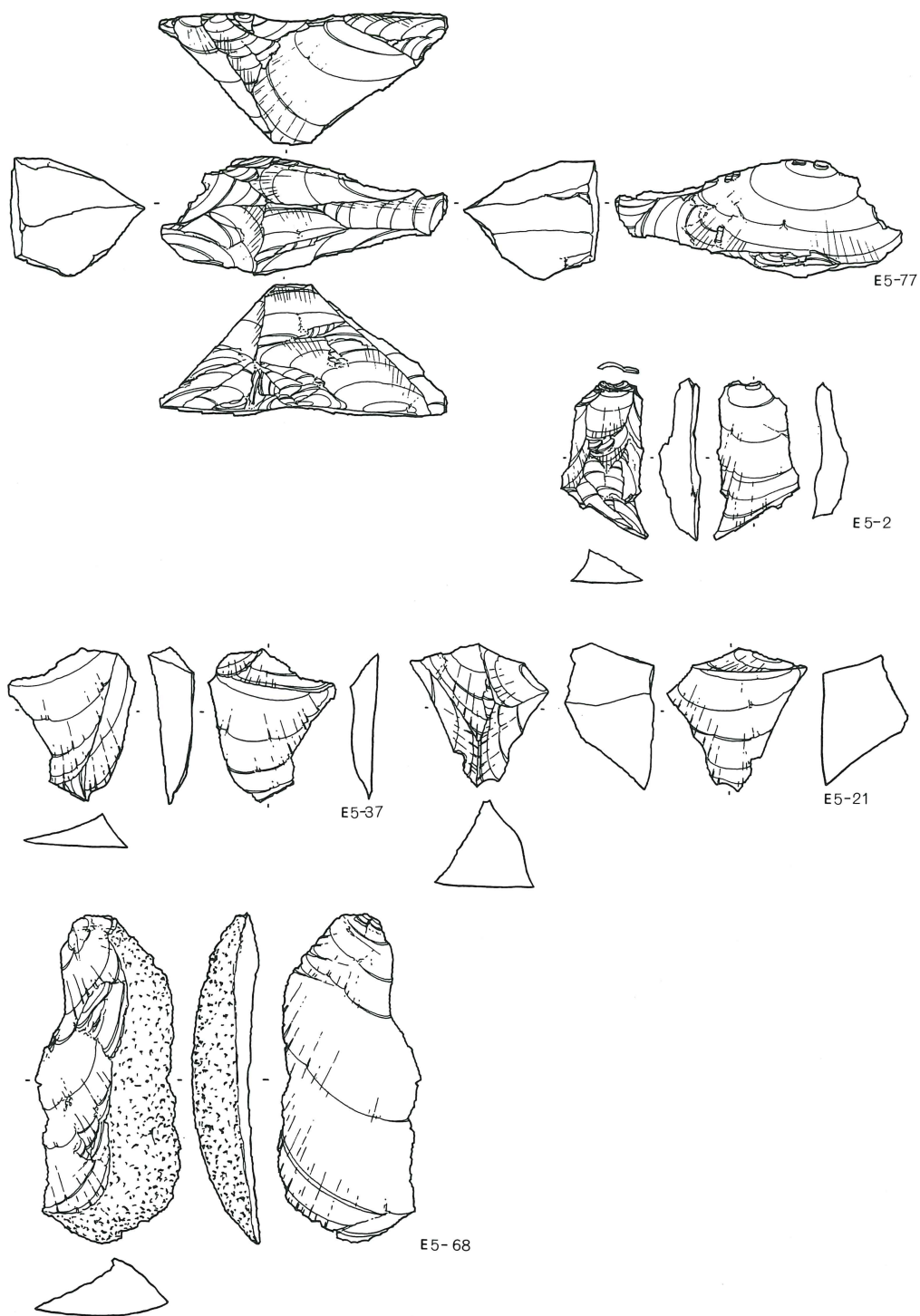
第14図 出土石器(6)

細石刃 (第10図)

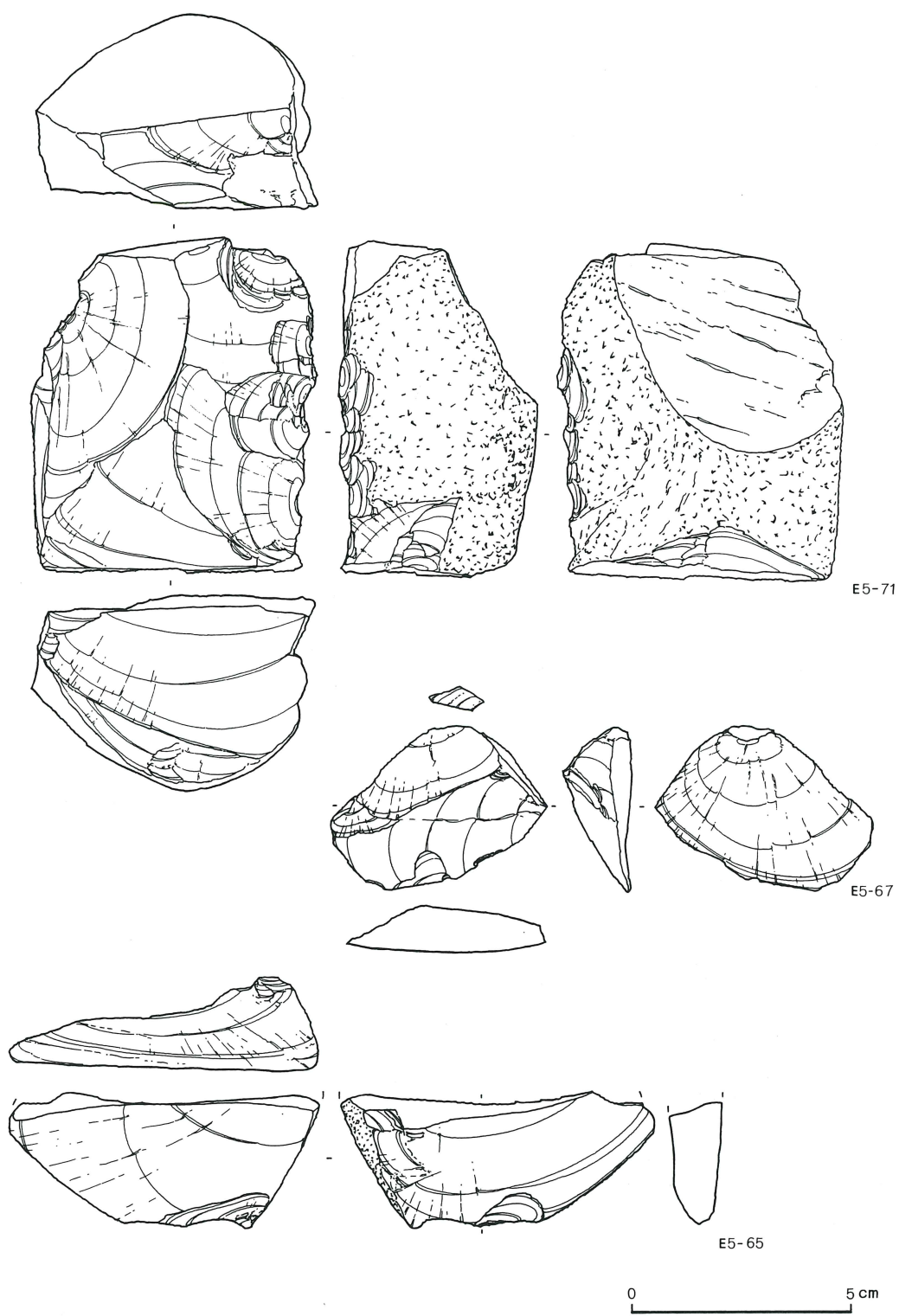
ほとんどが黒耀石製である。形状の整ったものは少ない。

剥片 (第10～16図)

黒耀石製の剥片は原石面を残すものが多い。E5-74は厚さがあり細石核の素材となるような剥片である。



第15図 出土石器(7)



第16図 出土石器(8)

チャート製の剥片は多いが、形状の整ったものは少ない。

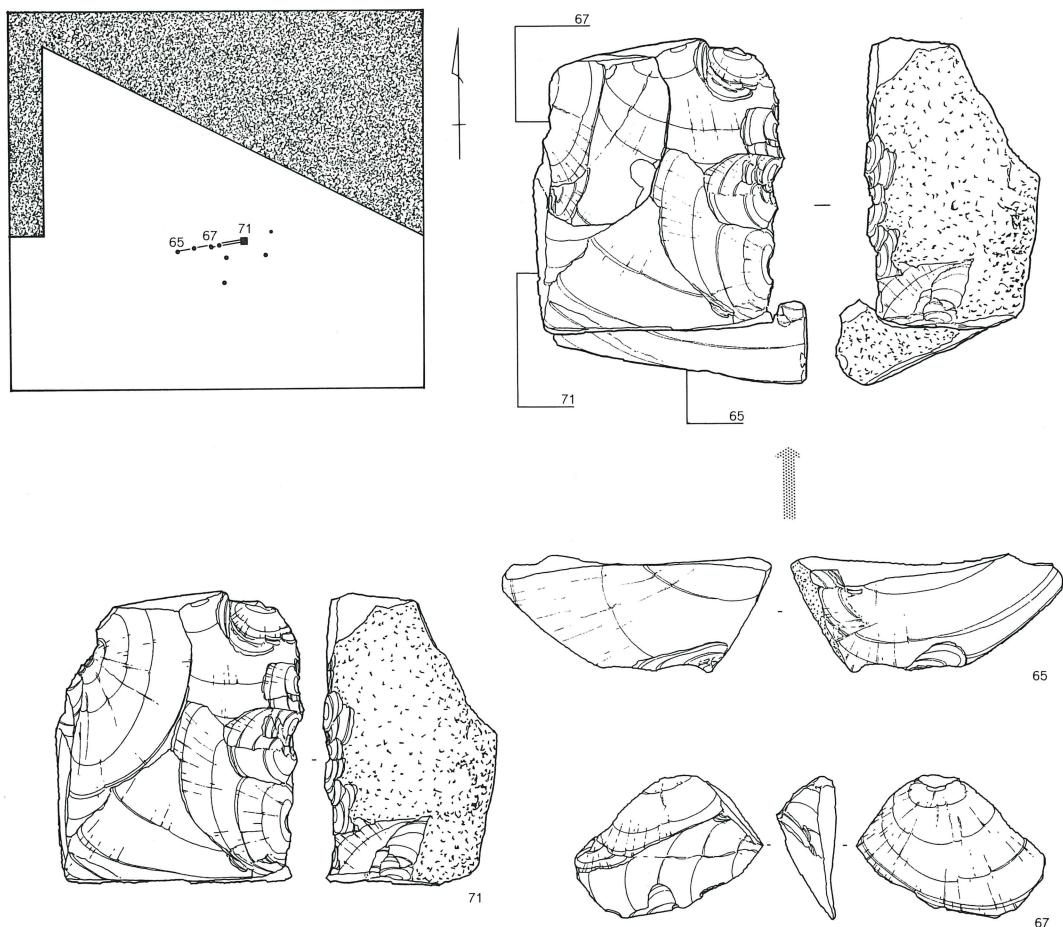
安山岩製の剥片は E5-68を除くと厚手で不定形のものばかりである。

石核 (第11・15・16図)

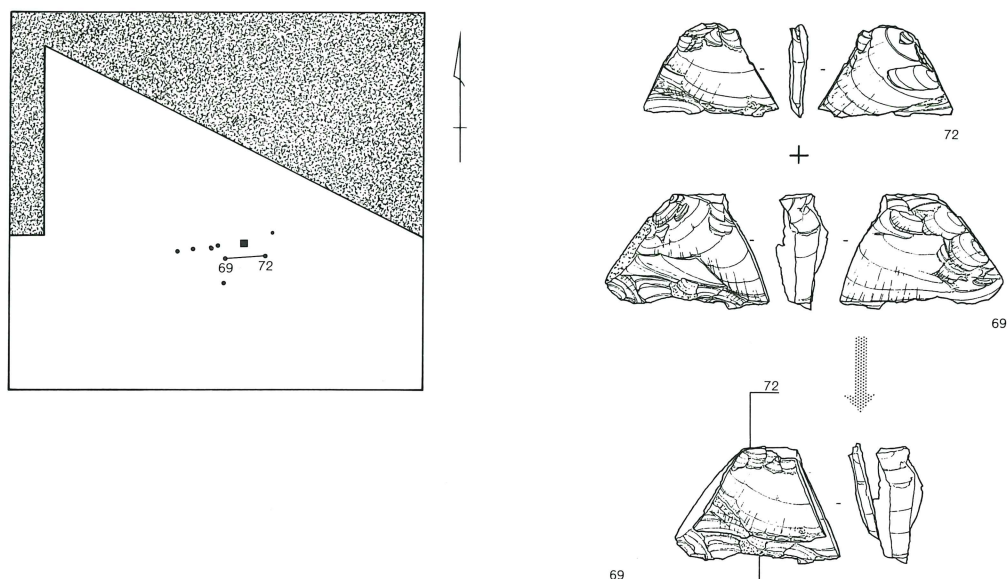
E 5-30作業面の外形は逆三角形状をしており、細い縦長の剥離面が並んでいる。形状はD 5-3の細石核に非常に近似しており、分類で迷ったが、ここでは石核としておいた。打面は左方向からの単剥離面で、打点は剥片剥離が進んでいるため残っていない。右側面は作業面方向からの剥離によって整えられている。左側面にも正面同様の細い縦長の剥離面がみられる。横断面は方形をしている。

E 5-77外形は船底状を呈する。非常に厚手の不定形剥片を素材とし主要剥離面から剥片剥離を行っている。

E 5-71外形は方形である。裏面に原石面を残し、正面の分割面を作業面としている。



第17図 接合図(1)



第18図 接合図(2)

接合資料（第17～19図）

接合(1)（第17図）

71の石核に65と67の剥片が接合している。拳よりやや大きい礫を素材とし、2つに大きく分割した後、石核に用いている。剥片65は石核の底面に接合する。剥片は厚手で不定形であることから、剥片剥離を目的とする前段階の石核整形の剥片と思われる。67の剥片は正面からの調整剥離によって出来た打面を利用し、正面を石核の分割面とする剥片である。やや厚手ではあるが本石核から意図した剥片と思われる。

分布はクラスターaにまとまる。接合距離は石核71と65は1.0m。石核71と67は0.4mである。

接合(2)（第18図）

72と69の剥片の接合である。2点の接合の間にもう1枚の剥片が想定される。

分布は接合(1)同様クラスターaにまとまる。接合距離は0.5mである。

接合(3)（第19図）

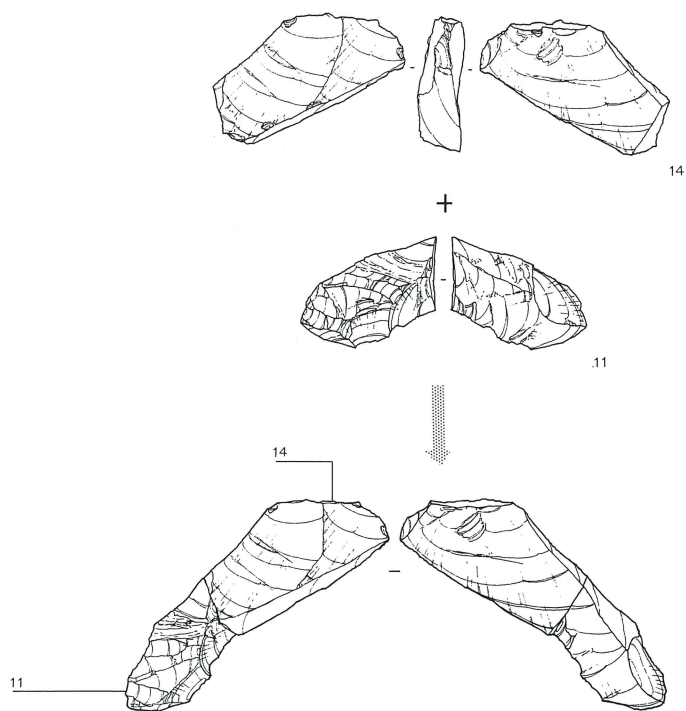
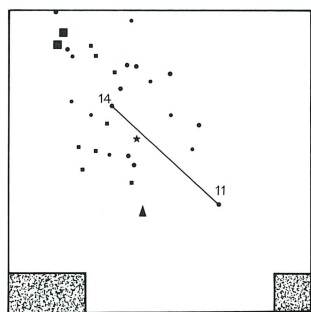
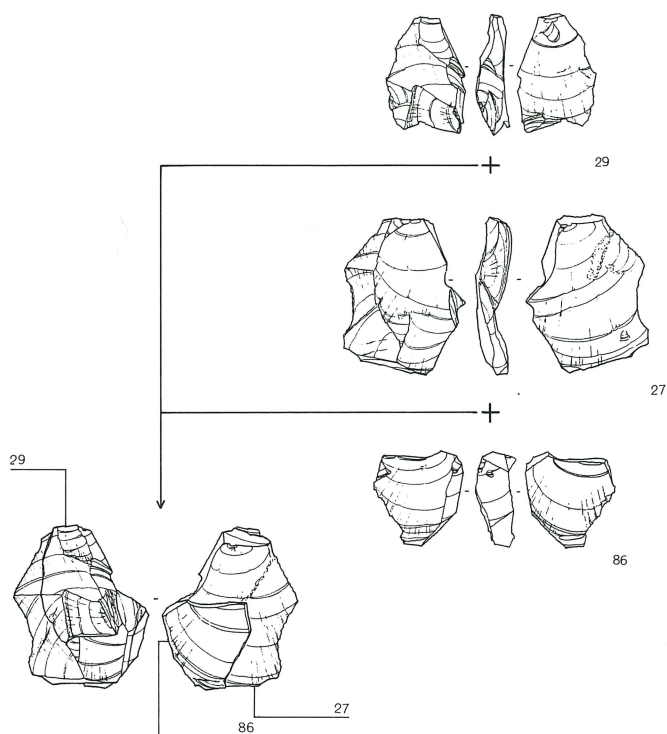
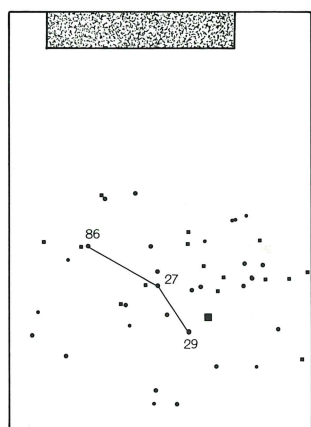
29と27と86の剥片の接合である。剥片剥離の工程は29→27→86の順で剥離されている。86は上半部を欠損する。剥片の形状は整ったものではない。

分布はクラスターbにまとまる。接合距離は86と27が1.1m、27と29が0.9mである。

接合(4)（第19図）

14と11の接合。不定形で横に長い剥片が2点に折れたものである。

分布はクラスターcからで、接合距離は1.9mである。



第19図 接合図(3・4)

石材別分布（第20図）

石材の分布を各クラスターの傾向でみる。

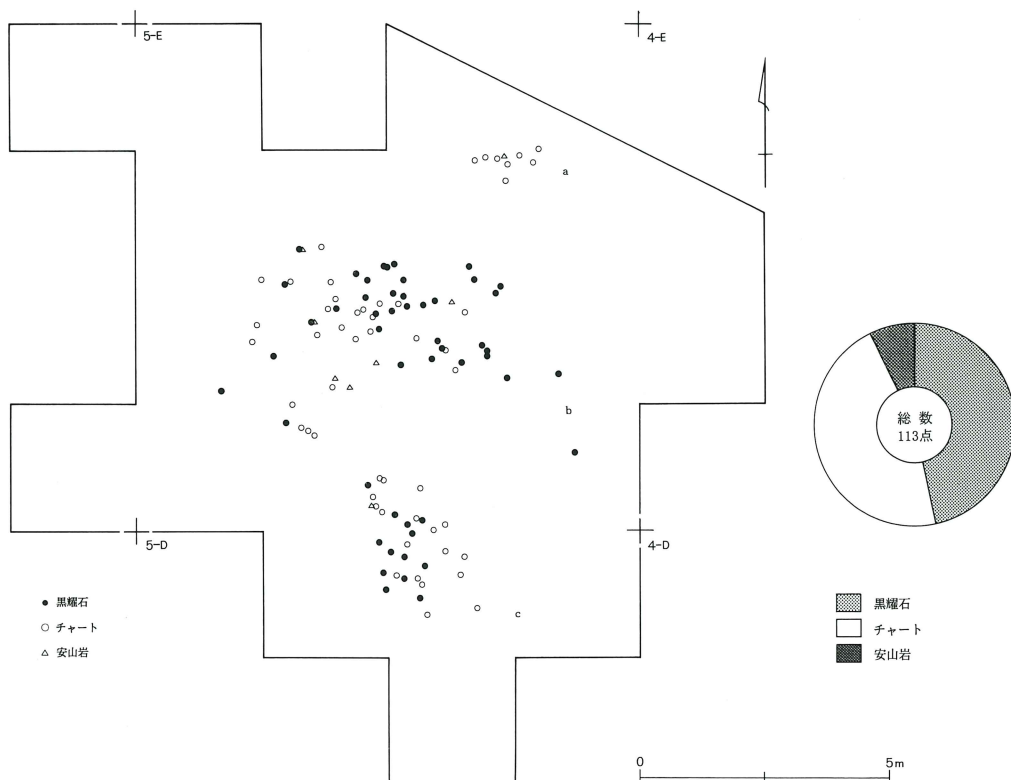
クラスターa チャートを主体とし、安山岩が1点含まれる。黒耀石は1点も出土していない。

クラスターb 黒耀石が北東、チャートが南西の分布傾向がみられる。安山岩は明確な傾向はみられず、散漫に分布している。

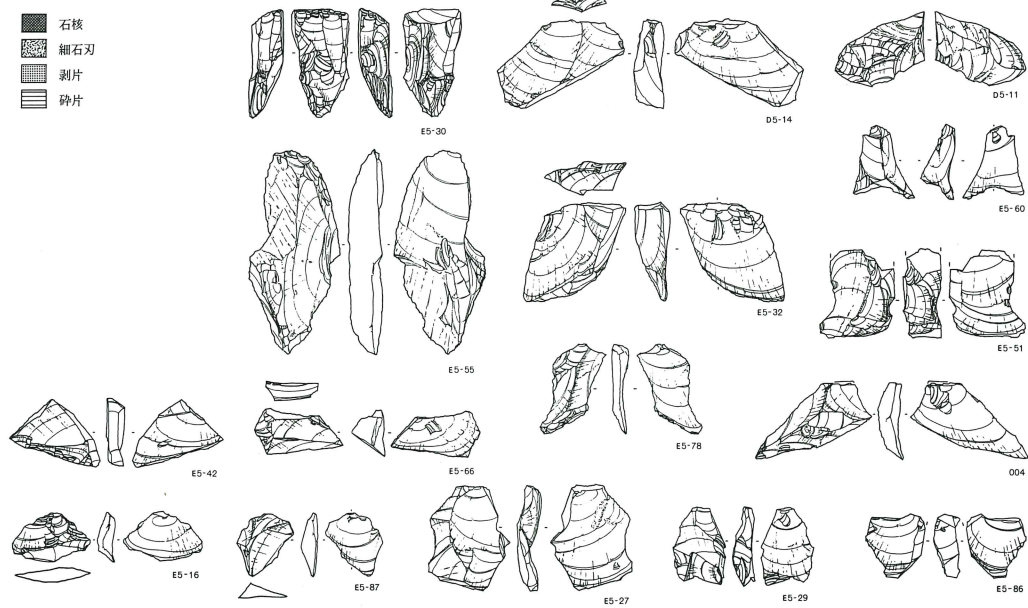
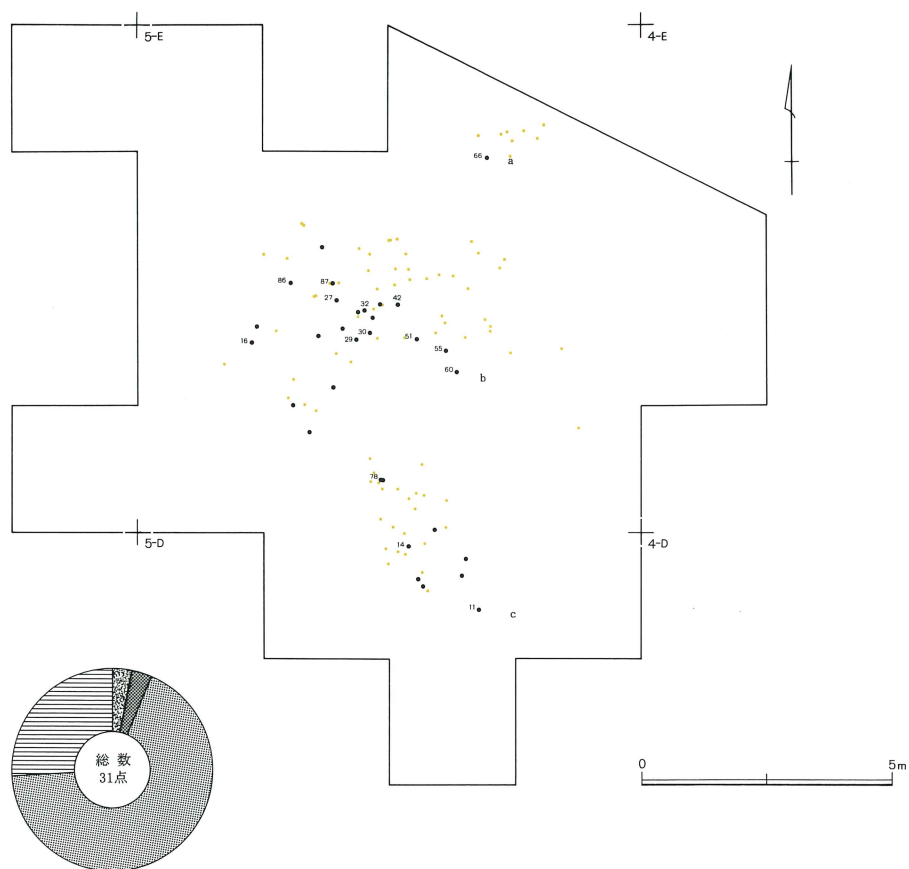
クラスターc クラスターbとは逆に西に黒耀石、東にチャートが分布する傾向がみられる。安山岩は僅かに1点含まれる。

黒耀石分布（第21図）

黒耀石は総数53点で、細石核、打面再生剥片、細石刃等、細石器との関わりの深いもののばかりである。



第20図 石材別分布図



第22図 チャート母岩 1 分布図

クラスター a 1 点も検出されていない。

クラスター b 細石刃と剥片が出土している。石器は僅かではあるが東側に偏って分布している。

クラスター c 細石核、打面再生剥片、細石刃と剥片が狭い範囲に密集している。

チャート母岩 1 分布 (第22図)

チャートの母岩 1 は総数31点である。母岩 1 の石器は E 5-66 の石核が D 5-3 の細石核と非常に近似している。剥片類は接合するが、不定形のものが多い。

クラスター a チャートを主体としたまとまりであるが、母岩 1 の石器は僅かに E 5-66 の剥片 1 点である。

クラスター b E 5-30 の石核と剥片が出土している。分布は黒耀石が東に偏るのに対し母岩 1 は西側に偏る傾向がみられる。

クラスター c 石器は黒耀石のまとまりの周辺を、さも囲むように分布している。D5-14 と D5-11 の接合資料がみられる。

石器一覧

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(cm)	器 種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	実測
1	E-5	995	588	9355.0	碎片	3.35	1.75	0.55	1.31	チャート 母岩 No.1	
2	E-5	986	612	9344.4	剥片	3.45	1.9	0.9	4.20	チャート 母岩 No.2	実測
3	E-5	976	568	9349.6	剥片	1.7	2.3	0.45	1.16	黒耀石	実測
4	E-5	974	554	9352.9	剥片	1.75	1	0.2	0.32	チャート 母岩 No.3	
5	E-5	984	540	9345.8	碎片	0.8	1.55	0.3	0.17	黒耀石	
6	E-5	964	514	9348.5	細石刃	1.5	0.6	0.15	0.08	黒耀石	実測
7	E-5	914	564	9351.3	碎片	1	0.9	0.3	0.23	チャート 母岩 No.2	
8	E-5	948	462	9344.5	石核	3.35	4.45	1.9	15.35	安山岩 母岩 No.1	
9	E-5	904	460	9355.0	剥片	1.15	2	0.5	1.15	黒耀石	
10	E-5	812	352	9353.0	碎片	0.75	0.3	0.2	0.02	チャート 母岩 No. 4	
11	E-5	802	340	9353.7	碎片	1.2	2	0.4	0.60	チャート 母岩 No.1	
12	E-5	796	328	9352.0	碎片	0.5	0.45	0.15	0.04	チャート	
13	E-5	784	298	9352.8	剥片	3.5	1.8	0.9	3.50	黒耀石	実測
14	E-5	750	308	9352.8	碎片	1.6	0.9	0.25	0.36	チャート 母岩 No.1	
15	E-5	654	272	9357.5	剥片	2.2	2.7	0.65	2.00	黒耀石	
16	E-5	626	228	9350.5	剥片	3.1	2	0.7	3.00	チャート 母岩 No.1	実測
17	E-5	594	238	9356.4	碎片	1.2	1.35	0.2	0.27	チャート 母岩 No.1	
18	E-5	720	170	9341.7	細石刃	1.2	0.65	0.2	0.04	黒耀石	実測
19	E-5	716	390	9354.0	碎片	1.35	0.8	0.2	0.12	チャート 母岩 No.1	
20	E-5	698	392	9354.9	剥片	3.2	2.2	1.1	5.46	安山岩 母岩 No.1	
21	E-5	716	420	9350.5	剥片	3.15	3.1	2	12.01	安山岩 母岩 No.1	実測
22	E-5	614	358	9354.3	碎片	0.95	0.6	0.15	0.02	チャート 母岩 No.1	
23	E-5	588	348	9352.2	細石刃	1.4	0.6	0.2	0.06	黒耀石	実測
24	E-5	586	352	9352.0	剥片	2.6	1.35	0.9	2.54	安山岩 母岩 No.1	
25	E-5	563	380	9356.0	細石刃	1.4	0.55	0.2	0.14	チャート 母岩 No. 4	実測
26	E-5	560	397	9351.5	碎片	1	0.85	0.3	0.18	黒耀石	
27	E-5	544	397	9352.9	剥片	4.15	3.2	1	11.30	チャート 母岩 No.1	実測
28	E-5	600	408	9352.4	剥片	4	1.7	1.5	4.50	チャート 母岩 No.1	
29	E-5	620	436	9355.0	剥片	3.1	2.15	0.8	4.26	チャート 母岩 No.1	実測
30	E-5	608	464	9350.5	石核	4.3	2.35	1.4	15.00	チャート 母岩 No.1	実測
31	E-5	567	440	9349.3	剥片	4	1.1	0.8	2.64	チャート 母岩 No.1	
32	E-5	564	452	9355.0	剥片	4.1	3.9	1.4	17.27	チャート 母岩 No.1	実測
33	E-5	536	456	9352.8	細石刃	1.8	0.5	0.3	0.09	黒耀石	実測
35	E-5	492	437	9351.8	細石刃	2.15	0.7	0.3	0.20	黒耀石	実測

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(cm)	器 種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	実測
36	E-5	444	323	9353.0	細石刃	1.9	0.7	0.3	0.36	黒耀石	実測
37	E-5	447	328	9354.0	剥片	3.4	2.8	1.1	5.00	安山岩 母岩 No.1	実測
38	E-5	440	368	9355.5	剥片	1.65	2.7	0.9	2.36	チャート 母岩 No.1	
39	E-5	502	532	9345.0	細石刃	1	0.7	0.2	0.10	黒耀石	
39	E-5	502	532	9345.3	碎片	1.05	0.7	0.02	0.07	黒耀石	
40	E-5	532	512	9349.8	碎片	1.3	1.7	0.55	0.84	黒耀石	
41	E-5	534	536	9348.4	碎片	0.8	0.45	0.2	0.03	黒耀石	
42	E-5	552	520	9351.8	剥片	3.6	2.7	0.8	5.85	チャート 母岩 No.1	実測
43	E-5	564	510	9345.8	剥片	3.8	1.55	1.4	25.69	黒耀石	実測
44	E-5	554	540	9344.4	細石刃	1.4	0.6	0.25	0.12	黒耀石	実測
45	E-5	554	572	9356.3	細石刃	1.15	0.7	0.2	0.16	黒耀石	
46	E-5	544	595	9353.3	細石刃	0.5	0.7	0.2	0.04	黒耀石	
47	E-5	548	625	9343.5	碎片	0.6	0.7	0.2	0.28	安山岩	
48	E-5	570	654	9344.5	碎片	0.5	0.35	0.35	0.03	チャート	
49	E-5	502	673	9346.0	碎片	0.55	0.5	0.1	0.03	黒耀石	
49	E-5	502	673	9346.0	碎片	0.7	0.35	0.1	0.03	黒耀石	
49	E-5	502	673	9346.0	碎片	0.4	0.25	0.05	0.01	黒耀石	
50	E-5	668	528	9352.5	碎片	0.55	0.3	0.01	0.01	黒耀石	
51	E-5	620	556	9344.0	剥片	3.5	3	1.55	13.00	チャート 母岩 No.1	実測
52	E-5	658	590	9358.5	細石刃	1.5	0.7	0.25	0.15	黒耀石	実測
53	E-5	637	608	9356.0	碎片	2.3	1.7	0.45	0.18	黒耀石	
54	E-5	624	601	9357.0	細石刃	0.85	0.65	0.2	0.08	黒耀石	
55	E-5	644	612	9345.8	剥片	8.1	3.6	1.4	34.80	チャート 母岩 No.1	実測
56	E-5	632	688	9353.0	細石刃	0.5	0.7	0.05	0.03	黒耀石	
57	E-5	644	698	9342.9	碎片	1.5	0.95	0.2	0.18	黒耀石	
58	E-5	652	700	9356.0	碎片	0.3	0.3	0.01	0.01	黒耀石	
59	E-5	666	648	9355.4	細石刃	0.95	0.75	0.2	0.15	黒耀石	
60	E-5	684	633	9348.0	剥片	3	2.4	1.4	3.48	チャート 母岩 No.1	実測
61	E-5	696	738	9345.7	細石刃	0.75	0.4	0.1	0.03	黒耀石	
62	E-5	688	840	9346.9	細石刃	0.55	0.4	0.05	0.01	黒耀石	
63	E-5	530	715	9350.3	剥片	1.3	2.4	1.3	2.10	黒耀石	
64	E-5	514	726	9346.5	碎片	1.5	0.95	0.3	0.29	黒耀石	
65	E-5	272	674	9355.0	剥片	7.2	3.1	2.2	40.67	チャート 母岩 No. 5	実測
66	E-5	266	696	9355.0	剥片	3.5	1.8	1.4	6.18	チャート 母岩 No.1	実測
67	E-5	268	720	9353.9	剥片	3.8	5	1.6	20.27	チャート 母岩 No. 5	実測
68	E-5	264	730	9349.7	剥片	7.15	3.2	1.5	25.04	安山岩 母岩外 No.2	実測
69	E-5	280	740	9346.2	剥片	4.3	3.1	1.35	16.37	チャート 母岩 No. 4	実測
70	E-5	312	736	9342.6	剥片	4.05	1.3	0.9	4.00	チャート 母岩 No. 4	実測
71	E-5	262	764	9345.1	石核	7.7	6.65	4.7	313.14	チャート 母岩 No. 5	実測
72	E-5	276	790	9353.0	剥片	3.6	2.5	0.5	4.00	チャート 母岩 No. 4	実測
73	E-5	249	802	9348.3	碎片	0.95	2.6	0.45	1.00	チャート	
74	E-5	842	873	9334.3	剥片	3.1	1.9	1.3	5.70	黒耀石	実測
75	E-5	961	485	9351.9	碎片	0.3	0.6	0.05	0.01	チャート	
76	E-5	951	476	9343.4	剥片	1	3.25	1.15	3.58	チャート 母岩 No. 3	
77	E-5	931	469	9336.1	石核	6.3	2.9	2.6	33.74	チャート 母岩 No. 3	実測
78	E-5	895	484	9351.5	剥片	3.6	2.6	0.7	3.46	チャート 母岩 No.1	実測
79	E-5	668	473	9353.3	剥片	1.7	3.85	1.15	7.23	安山岩 母岩 No.1	
80	E-5	600	482	9355.0	碎片	0.3	0.35	0.01	0.01	黒耀石	
81	E-5	580	470	9345.8	碎片	0.95	3	0.5	1.36	チャート 母岩 No.1	
82	E-5	570	475	9345.1	細石刃	2.6	0.8	0.6	0.65	黒耀石	実測
83	E-5	552	483	9348.3	細石刃	0.6	0.85	0.1	0.08	チャート 母岩 No.1	
84	E-5	505	247	9344.3	細石刃	1.1	0.7	0.15	0.13	チャート	実測
85	E-5	512	294	9348.3	細石刃	0.5	0.8	0.1	0.04	黒耀石	
86	E-5	510	305	9344.7	剥片	2.6	2.4	1.05	20.00	チャート 母岩 No.1	実測
87	E-5	510	387	9351.3	剥片	2.5	2.3	0.7	2.00	チャート 母岩 No.1	実測
88	E-5	504	459	9351.4	碎片	1.3	0.9	0.1	0.06	黒耀石	
89	E-5	477	500	9347.9	碎片	0.55	0.25	0.1	0.01	黒耀石	

番号	グリッド	北-南(cm)	西-東(cm)	標高(cm)	器 種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	実測
90	E-5	473	513	9351.7	碎片	0.3	0.65	0.05	0.01	黒耀石	
91	E-5	478	662	9355.0	碎片	0.3	0.4	0.05	0.01	黒耀石	
92	E-5	897	488	9343.5	剥片	2.1	1.25	0.55	1.31	チャート 母岩 No.1	
93	E-5	476	496	9344.6	碎片	0.3	0.5	0.1	0.03	黒耀石	
1	D-5	54	530	9348.8	細石刃	2.2	1	0.4	0.51	黒耀石	実測
2	D-5	93	532	9346.0	碎片	0.85	0.45	0.1	0.03	黒耀石	実測
3	D-5	73	570	9351.8	細石核	2.6	2.1	1.3	4.23	黒耀石	
4	D-5	93	558	9342.5	剥片	2	2.3	0.75	2.20	チャート 母岩 No.1	
5	D-5	105	566	9349.3	剥片	2	2.4	1.05	2.87	チャート 母岩 No.1	
6	D-5	130	564	9349.0	細石刃	1.2	0.65	0.2	0.09	黒耀石	実測
7	D-5	165	576	9348.4	尖頭器	10.05	2.65	1.1	29.60	チャート 母岩 No. 4	実測
8	D-5	41	612	9345.0	碎片	0.85	0.45	0.35	0.08	チャート	実測
9	D-5	52	650	9343.5	剥片	2.45	1.4	0.45	1.60	チャート 母岩 No.1	
10	D-5	86	642	9348.2	碎片	1.5	1.25	0.25	0.72	チャート 母岩 No.1	
11	D-5	152	676	9342.0	剥片	2.95	3.6	1.3	11.58	チャート 母岩 No.1	
12	D-5	41	508	9344.0	碎片	1.9	0.85	0.3	0.38	黒耀石	実測
13	D-5	4	548	9344.3	打面再生剥片	1.95	1.9	0.7	1.61	黒耀石	
14	D-5	28	538	9345.0	剥片	5.1	3.5	1.25	15.55	チャート 母岩 No.1	
15	D-5	24	484	9344.8	碎片	0.8	1.35	0.4	0.28	黒耀石	
16	D-5	88	516	9342.1	細石刃	0.95	0.55	0.15	0.06	チャート	実測
17	D-5	83	493	9346.0	細石刃	1.1	0.75	0.15	0.09	黒耀石	
18	D-5	112	498	9342.8	細石刃	1.7	0.65	0.2	0.26	黒耀石	
001					細石刃	1.4	0.75	0.2	0.27	黒耀石	実測
002					細石刃	2.4	0.6	0.5	0.3	黒耀石	実測
003					剥片	2.8	2.6	0.7	8.2	黒耀石	実測
004					剥片	3	4.7	1	8.42	チャート 母岩 No.1	実測

2 その他の遺構と遺物

先土器時代の石器集中区の他には、時期不明の溝が2条検出された。

第1号溝（第23図）

1号溝はII区の台地上に位置する。台地が東から徐々に傾斜しながら、次第に平坦になるその傾斜変換地点付近にあたる。J・K・L—16グリッドで調査区を横断するようにほぼ南北に走っており、検出した長さは約17～18mほどである。平面図は複雑であるが、基本的には3条の溝が平行している。すなわち、中央に深い溝が1条とその溝の両側にやや浅い溝が2条走り、それぞれが集合して1条の溝となっている。ただし溝の東南部分は攪乱によってプランを確認することができなかったが、東側の溝は調査区の両端では消滅するようである。西側の浅い溝は幅0.2～0.6mで深さが30cm前後、中央の深い溝は幅1.2～1.6mで深さが130cm前後、東側の浅い溝は幅0.3～0.6mで深さが20cm前後である（深さは確認面から）。3条の溝を合わせた掘り方は、幅3.2～4.0mに達する。覆土の状況からみて、これらの3条の溝は同時に掘削されており、はじめから1条の大きな溝にする意図があったと考えられる。

溝の側壁には全体にわたって、鋤による掘削の痕跡がみられた。中央の深い溝の下端幅はちょうどその鋤の刃幅に該当する。つまり溝方向とは直角に鋤を立てて掘削していった。その他の側壁の鋤跡は規則的ではなく、任意に溝の形態を整えていったようである。

覆土からは縄文土器片が数点と打製石斧が1点出土している程度で、溝の時期を決定することはできない。しかし調査区周辺の地形をみると、この溝の延長上はいずれも明確な段を形成して、畑の境界線となっている。したがってこの畑地を造成した際に掘削されたものと推定され、時期は不明であるが、それほど遡るものではなかろう。

第2号溝（第24図）

I区の西端付近に位置し、川縁の低地状の地形から、台地にむかう転換地点に相当する。現在台地の裾を取り巻くように走る市道と平行して、南西から北東にのびている。G—8・9グリッドで検出され、それよりも南西側は攪乱によって破壊されていた。幅は2.2～2.5m、深さは40cm前後で、掘り方はなだらかである。

覆土には砂質の層や粘土層などが縞状に堆積していることから、流水によって自然に埋まっていた様子を看取することができる。

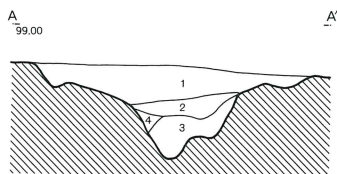
土器などの遺物はまったく出土しなかったのが時期は不明であるが、現在の地表面から溝の検出面までは約1.5mあり、覆土もしまりのよい状態であったので、それほど新しくないと考えられる。機能としては台地と低地の転換地点における排水路のようなものを想定することができる。

グリッド出土遺物（第25図）

1 条痕文土器



+

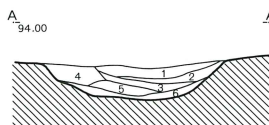
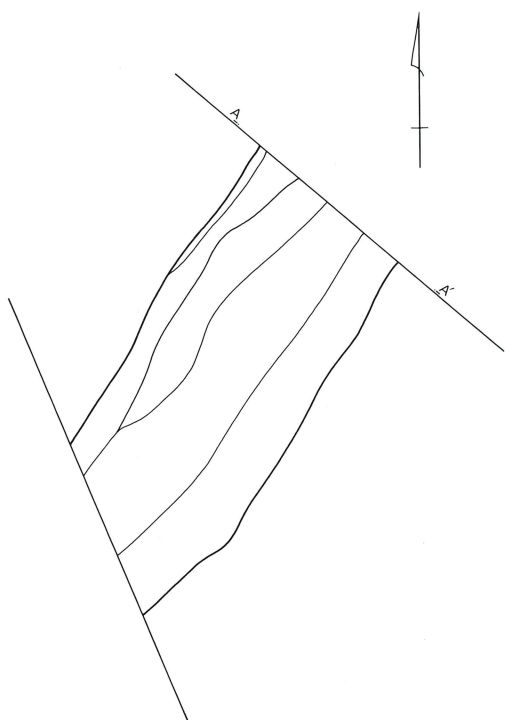


- 1 暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む。しまりの悪い土層。）
- 2 暗褐色土（1層と類似。大きいロームブロックを含む。）
- 3 暗黒褐色土（ロームブロックとの混合層。粘質で堅い。）
- 4 暗黒褐色土（ロームブロックをあまり含まない。）

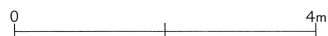
+



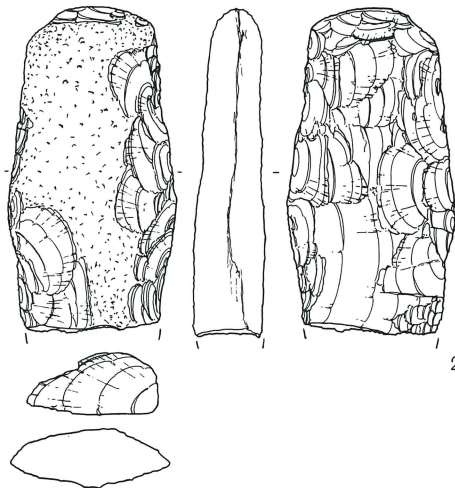
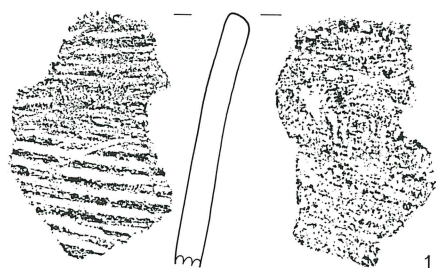
第23図 第 1 号 溝



- 1 黒褐色土と黄褐色砂の混合層
- 2 1層よりも砂の多い層（砂は酸化して赤褐色化。）
- 3 1層と類似するが、砂が少ない層
- 4 黒褐色土（炭、砂をわずかに含む。）
- 5 1層と同じ
- 6 黒褐色土（水分を多く含む粘質。）



第24図 第2号溝



第25図 その他の遺物

2 打製石斧 下半部・刃部を裏面右方向からの力で欠損する。石材は砂岩である。正面に原石面、裏面に分割を残している。調整加工は裏面は面的、正面は周縁的剥離が施されている。

V 結 語

1 細石核について

清橋遺跡と近接する中砂遺跡、お伊勢山遺跡、下向原遺跡の細石核を作業面の形状及び長さ、打面、石材の項目で比較する。

清橋遺跡 1 作業面の形状は逆三角形である。打面は原石の平坦面を利用している。裏面は側縁方向の剝離が施されているが原石面を一部残している。作業面と打面の厚さの比は2対1で、作業面の長さは約2.5cmである。石材は黒耀石の小形角礫を用いている。2 打面再生剝片である。側面の一部に原石面を残している。石材は黒耀石である。

中砂遺跡 3 作業面は幅広の長方形である。打面は作業面方向からの複剝離面によって作られている。作業面と打面の厚さの比は2対1で、作業面の長さは2.5cmである。石材はチャートを用いている。4 作業面は概ね正方形である。打面は単剝離面によって平坦面が作られ、作業面からの打面調整剝片が一部みられる。作業面と打面の厚さの比は2対1で、作業面の長さは1.3cmである。石質は黒耀石を用いている。5 作業面は縦長逆三角形である。打面は側面方向からの剝離によって構成される。作業面と打面の厚さの比は2.5対1で作業面の長さは2.5cmである。石材はチャートを用いている。

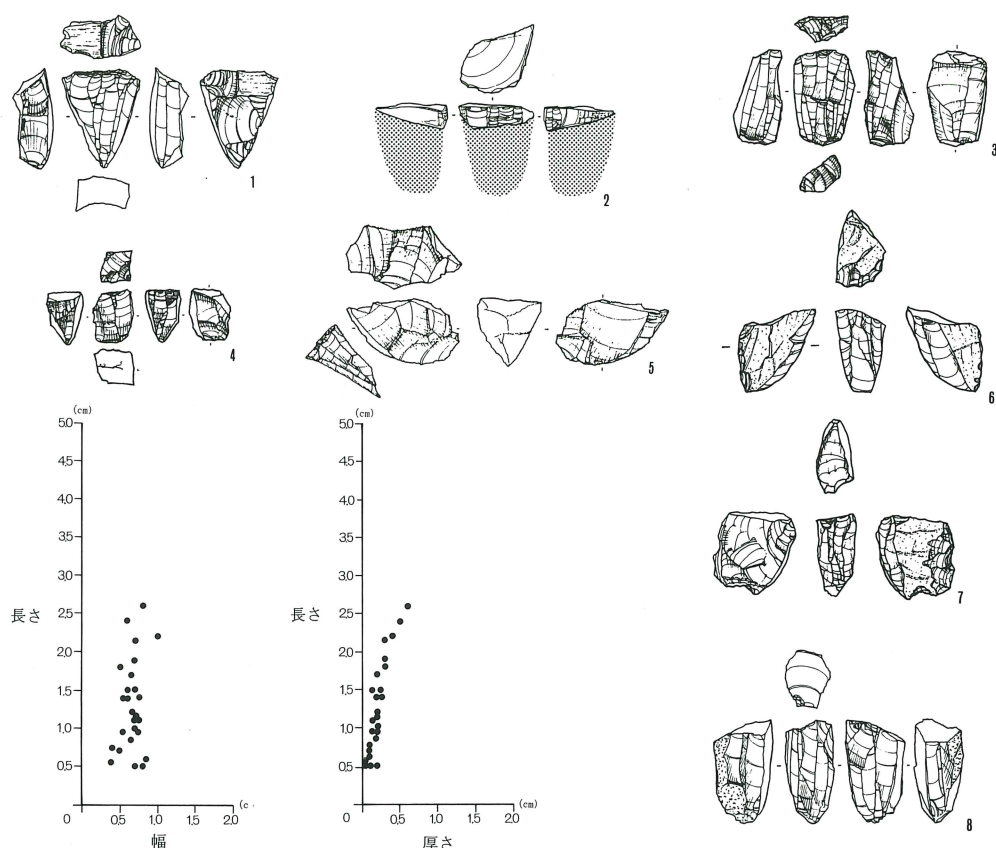
お伊勢山遺跡（台地西部） 6 作業面は縦長長方形である。打面は原石面に作業面方向からの細かな打面調整剝離が施されている。側面及び裏面に原石面を大きく残しており、原石をほとんど加工せず石核にしている。作業面と打面の厚さとの比は1対2で、作業面の長さは約2.0cmである。石材は黒耀石の盤状の小形礫を用いている。7 作業面は概ね縦長長方形である。打面は作業面方向からの単剝離によって作られている。右側面に原石面、左側面に素材剝片の主要剝離面を残している。作業面と打面の厚さとの比は2対1で、作業面の長さは2.0cmである。石材は黒耀石の剝片を用いている。

下向山遺跡 8 作業面は縦長長方形である。打面にみられる剝離面は、他の剝離面を全て切っている。打面再生以後は、細石刃の作出を行っていないようである。側面から裏面にかけて原石面が残っている。作業面と打面の厚さの比は1対1で、作業面の長さは2.7cmである。石材は黒耀石の小形の円礫を用いている。

以上、清橋遺跡と近接する遺跡の細石核8点を比較したが、作業面の長さは2～2.5cm程度で、中砂遺跡の3点以外は側面及び裏面に原石面が残り、小形の角礫か円礫をあまり加工せず用いている点が共通している。

2 細石刃について

清橋遺跡から出土した細石刃は総数28点でプライマリーな状態のもの26点、内16点を図示した。石質は黒耀石が24点、チャートが4点と圧倒的に黒耀石が占めている。



第26図 細石核・細石刃

分布はクラスターbに20点、クラスターcに6点と2か所のまとまりがみられる。

細石刃の残存する部位は頭部12点、中間部10点、末端部6点である。頭部12点の打面は点状が6点、線状が2点で他の3点はつぶれていて観察できなかった。細石刃は形状の整ったものが少なく、表面に原石面を残すものなどがみられる。また、比較的整った細石刃には微細な剝離痕がみられるものが目に付く。

大きさの平均は、長さ1.29cm、幅0.67cm、厚さ0.2cm、重量0.15gである。個別の項目をみると、長さは最大2.6cm、最小0.5cm、中央値が1.2cmで標準偏差は0.59である。幅は最大1.0cm、最小0.4cm、中央値が0.7cmで標準偏差が0.12である。厚さは最大0.6cm、最小0.05cm、中央値0.2cmで標準偏差は1.3である。

以上の数値を見る限りまとまりは弱く、特に長さでは使用に耐え難い状況である。細石核の作業面に残る剝離面をみると、2～2.5cm程度のものが剝離されていたことが伺え、使用に耐え得るものは遺跡の外に持ち出された可能性（刃部の再生）が高い。

武蔵野台地から大宮台地にかけて、1、2点の細石核と数本の細石刃を出土する遺跡があり、器種組成も剥片類を若干有する程度で比較的単純である。その様な遺跡の場合、概して細石刃に整ったものが少なく、微細な剝離痕がみられ、使用に適しないものがそのまま打ち捨てられたかのよう

である。規模（器種組成及び点数）と細石刃の関連から、短期的な空間利用として、利器の刃部再生等と深く関わった遺跡が想定できそうである。

3 細石器と尖頭器の関係について

細石器と尖頭器は先土器時代終末の石器群として、多くの論文が発表され、両者の関係は汎列島の立場で先土器時代の終焉と合わせ論じられている。

細石器と尖頭器の研究動向は、砂田氏によって「共存説」「断続説」「段階的変遷説」と整理されている（1993）。両者の関係は各氏それぞれの石器群変遷観と絡み微妙なニュアンスを含んでいる。しかし、1993年に行われたシンポジウムでは共存に疑義を持つ意見が体勢を占めていたように感じられた。

石器群の変遷において、層厚に恵まれ常にリーダーシップを取っている相模野台地の成果をもとに諏訪間氏が行った段階区分では

第1段階：野岳・休場型細石刃核のみ（段階IX）

第2段階：野岳・休場型細石刃核＋船野型細石刃核（段階X前半）

第3段階：削片系細石刃核のみ（段階X後半）

第4段階：神子柴系尖頭器＋削片系細石刃核（段階XI）

の4つの段階に区分している。しかし、氏も述べているように、第3段階の遺跡は相模野台地で確認されておらず、逆に群馬県から千葉県にかけては明確な第4段階の遺跡はみつかっていない。第3段階と第4段階が時間差であるのか、地域差であるのかは未解決の問題である。

相模野台地の細石器石器群を細石核の系統的波及によって段階区分する編年が、堤氏によって提唱されて以来、関東地方及び全国的に、この枠組みに沿うかたちでの編年が体勢を占めているように思われる。しかし、武蔵野台地・大宮台地では東西両地域で削片系細石核を出土する遺跡が複数調査されているのに対し、削片系・船底形細石核がほとんど確認されていない。そのため多数ある角柱形細石核の後に空白期が存在してしまう。その様な状況で、角柱形細石核と船底形細石核と尖頭器が出土している狭山遺跡B地点の解釈が大きな鍵を持っていると言えそうである。

次に細石器と尖頭器が出土した遺跡の様相を概観する。

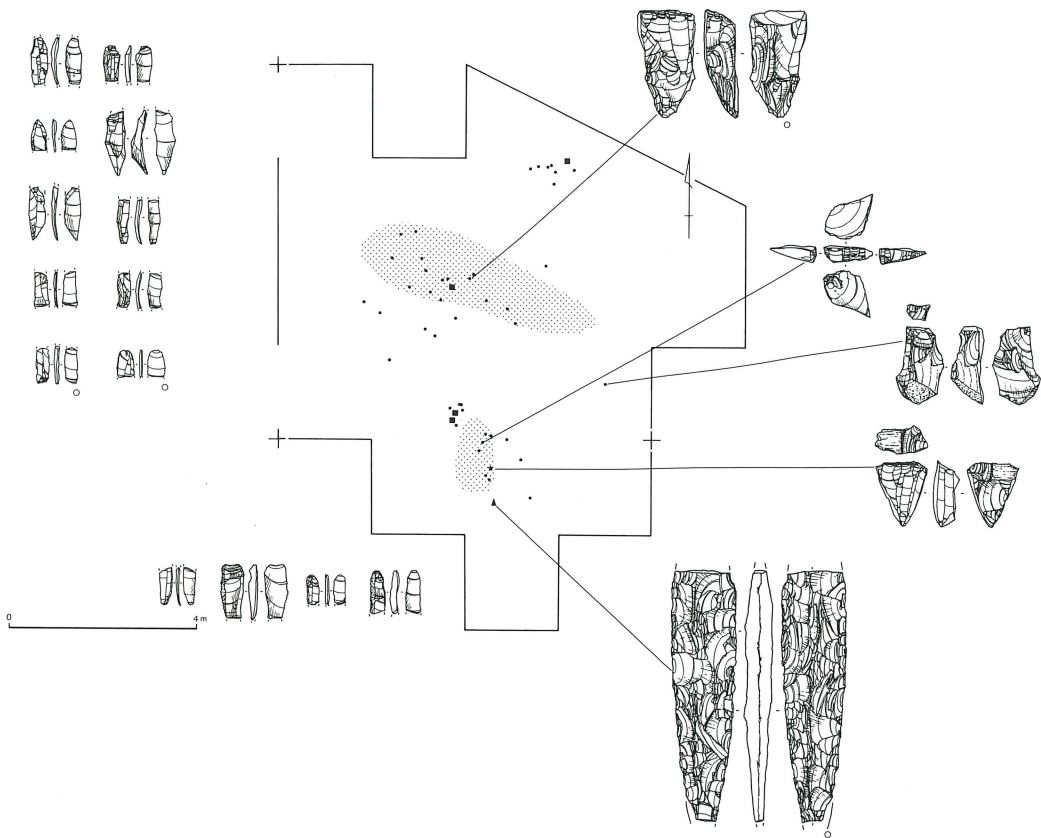
清橋遺跡（第27図）

清橋遺跡では石器集中1か所のみを検出であった。石器組成は細石核1点、打面再生剥片1点、細石刃、剥片等と尖頭器1点であった。

遺物は南北9.5m、東西7.5mと広い範囲に分布し、その中をさらに3つの小さなかたまり（クラスター）に区分することができる。クラスターは北からa～cとした。

遺物の出土層位はUG降灰層準のほぼ直上である。

細石核と打面再生剥片はクラスターcの中央部にまとまり、尖頭器はクラスターcの南縁辺部から出土している。細石刃はクラスターbから20点、クラスターcから6点の2か所のまとまりがみられる。



第27図 清橋遺跡

石材との関連をみると、細石器は黒耀石とチャート母岩 1 の間に強い関連がみられ、尖頭器と同一母岩と思われるチャートが 4 点出土している。

細石器と尖頭器の間に母岩の共有等は見られないが、分離する積極的な理由も見当たらない。

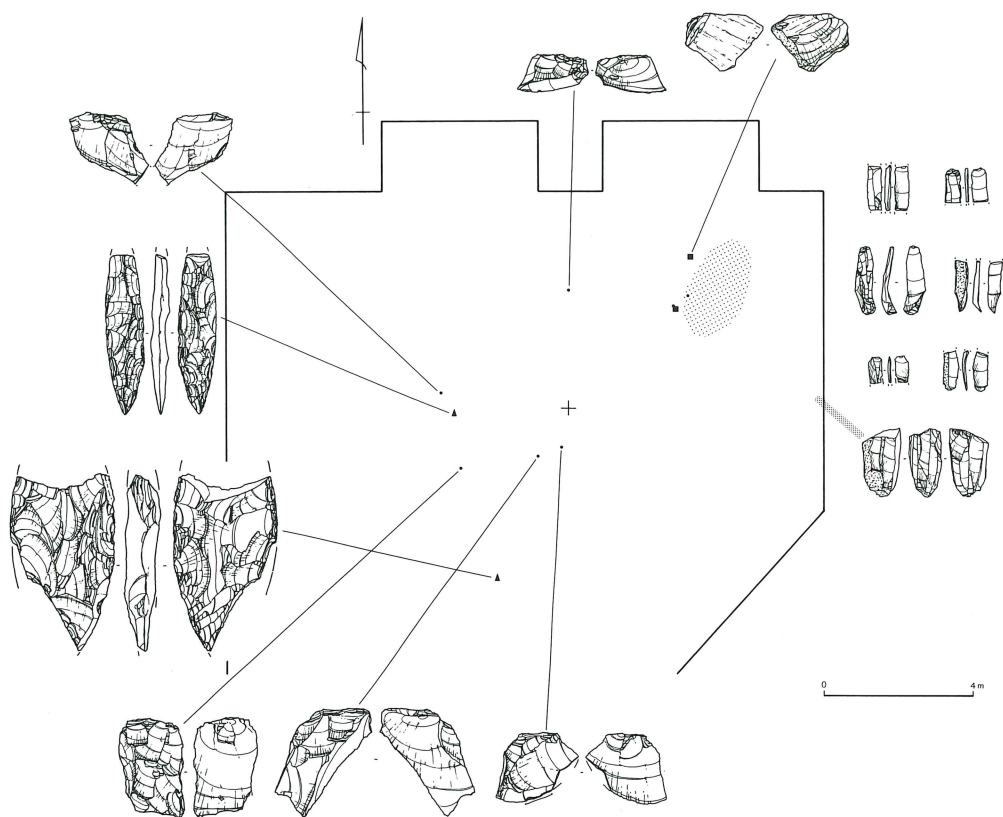
下向原遺跡（第28図）

日高市大字下大谷に所在する。先土器時代の遺物は約 8.5m 四方の範囲に、幾つかのまとまりを持って、石器 52 点、礫 40 点が分布している。礫群は杭の南西側に小さくまとまっている。

石器は細石器、尖頭器、ナイフ形石器が出土している。堆積層が薄いため、層位的には分離できなかったが、各石器群が小さなまとまりを形成しており、報告書では各まとまりを第 1 期（ナイフ形石器）、第 2 期（細石器）、第 3 期（尖頭器）としている。礫群と尖頭器の分布が重複することから同一時期の所産と考えられる。

石器群と石材の関係は黒耀石が細石器、チャート・安山岩が尖頭器と深く関連している。ナイフ形石器は黒耀石とチャートがみられたが、肉眼の観察によって分離できた。

細石器は杭の北東側に細石刃の集中がみられる。細石核の出土地点は不明であるが、帰属には問題がないと思われる。



第28図 下向山遺跡

一方、尖頭器は杭の西部にチャートの剥片類と一緒にまとまる傾向がある。

ナイフ形石器は別として、細石器と尖頭器の共伴に関しては否定的要素も多いが、調査区の限られた範囲に細石器と尖頭器が分布する例として挙げておく。

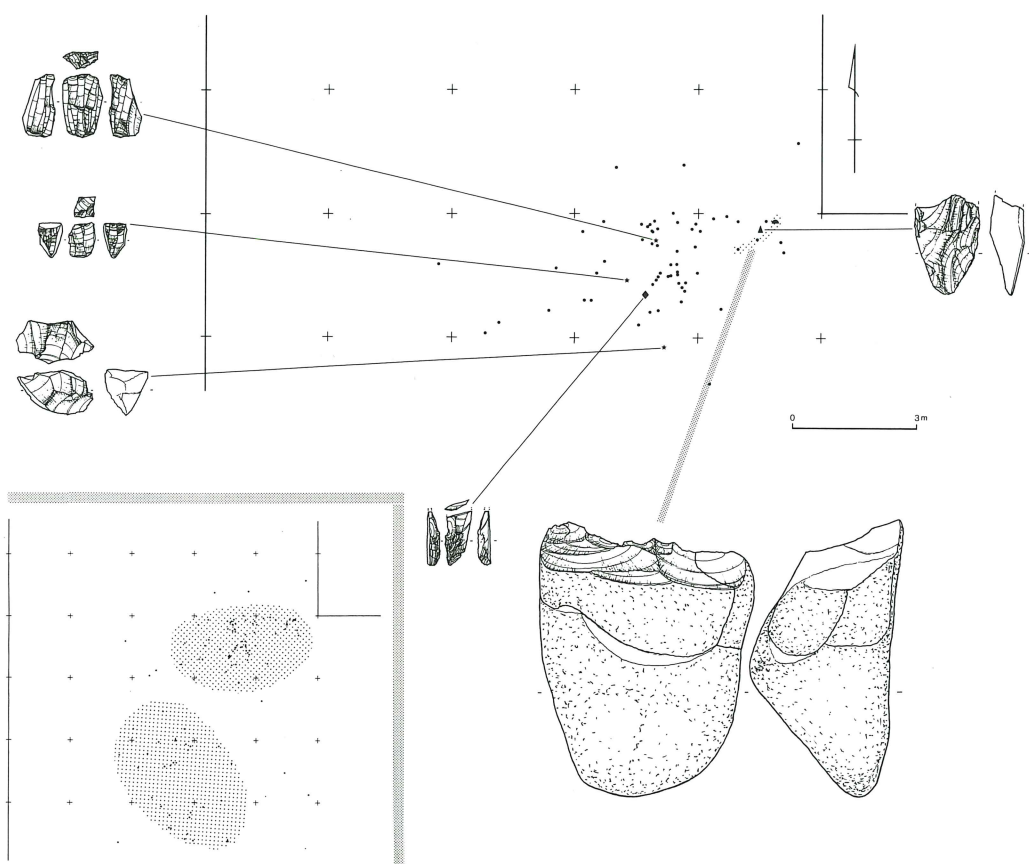
中砂遺跡（第29図）

中砂遺跡は砂川堀流域で、清橋遺跡と直線距離で約500mの地点にある。遺跡からは第Ⅴ層～第Ⅲ層までの複数文化層の石器群が検出されている。

細石器の出土した地点は、標高の最も低い部分で、土層の堆積状況はソフトロームのすぐ下が黒色帯となり、状況の良いところではない。細石器の分布と近接して尖頭器の石器集中がみられ、一部重複している。細石器によく伴う礫器状の石器とそれに接合する剥片類の分布範囲に、粘板岩の尖頭器が含まれている。

石材は細石器が黒耀石・チャートを素材としているのに対し、尖頭器は粘板岩を用いている。

比田井氏（1987）が細石器と尖頭器、ナイフ形石器と共伴する遺跡の例として分析対象にしているが、近接して尖頭器の石器集中もみられ、必ずしも共伴を積極的に支持できる出土状況ではない。



第29図 中砂遺跡

上草柳遺跡（第30図）

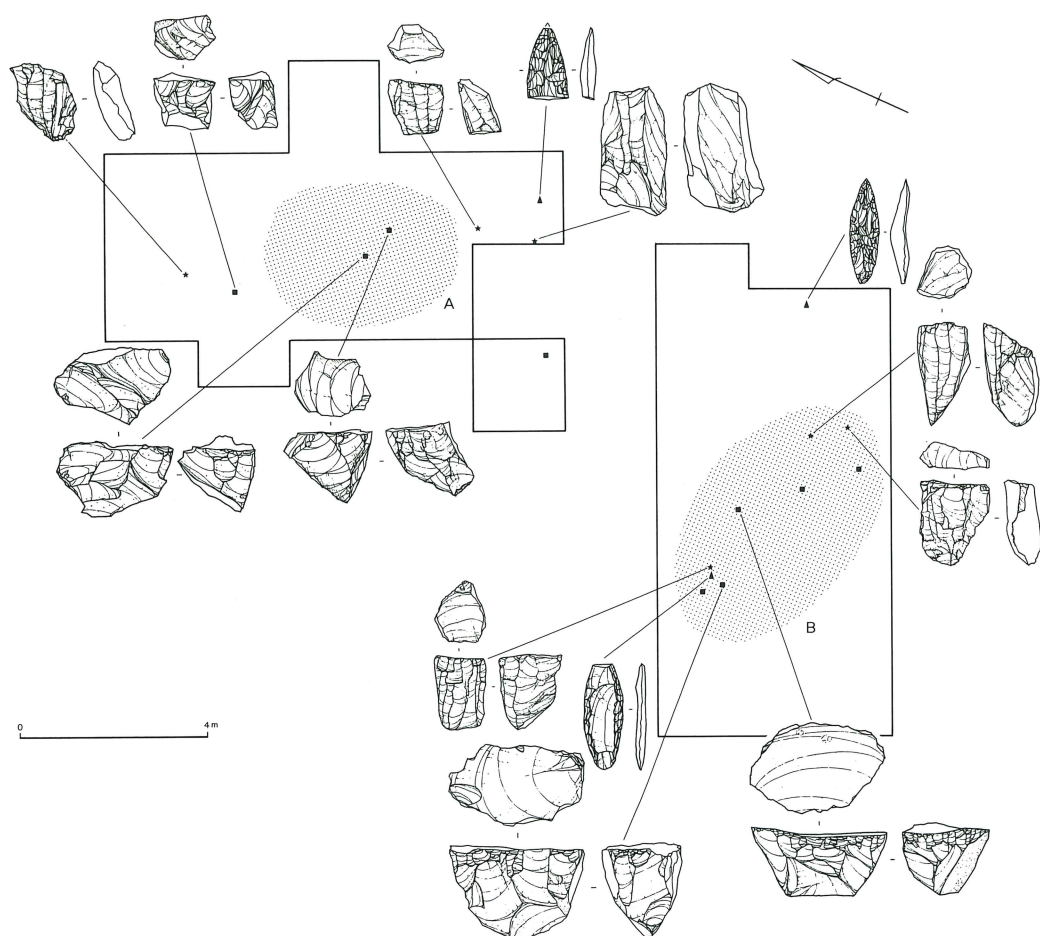
和南市に所在する。第Ⅰ地点第Ⅰ文化層から細石器の石器集中が2か所、ブロックAとブロックBが検出され、細石核は2か所の石器集中からそれぞれ角柱形と船底形の2形態が認められ、堤氏は「稜柱形+船底形」の段階に位置づけている。

細石核の石材は角柱形が黒耀石、舟底形が凝灰岩・頁岩が用いられている。細石刃は各ブロックの中央部に密集区を持っている。

尖頭器は3点出土している。内2点はブロックの中間部からの出土で、1点がブロックBの西端縁辺部からの出土である。形態は小形細身のもので石材は黒耀石と玄武岩が用いられている。

細石器と尖頭器を分離する積極的な理由はみつからないが、諏訪間氏は「ブロックの外縁部に単独個体資料の尖頭器が出土しているもので、ブロックの中心部でないことや個体の共有も認められない」（1993）点で共伴の可能性が低いとしている。

以上、幾つかの遺跡での細石器と尖頭器が共に出土した例をみたが、いずれの遺跡においても、決定要素に欠けている。しかし、複数文化層が重複する大形遺跡以外においても、繰返し角柱形細石核と尖頭器が出土するのは、単に共通する立地環境を好む等だけでは、片付けられない問題であ



第30図 上草柳遺跡

ろう。また、共に出土している尖頭器がいずれも新しい様相をもっている。角柱形→船底形・削片系といった流れで、角柱形を全て古く置き、船底形・削片系に変わるという編年では、武蔵野台地・大宮台地の遺跡の様相で解決できない部分が残るようである。

註

註1 一つの石器集中としてとらえる中で、更に小さなまとまりが見られることがしばしばある。その呼称として田村 隆氏は『小中台(2)遺跡・新掘込遺跡・馬場遺跡』で小ブロックとして「クラスター」という用語を用いている。ここでは分析概念としてではなく、視覚的まとまりの意味で用いることにした。

参考文献

- 吉田 格他 1970 『狭山・六道山・浅間谷遺跡』 東京都端徳町文化財調査報告 1
- 織笠 昭 1984 「細石器文化組成論」『駿台史学 第60号』 駿台史学会
- 堤 隆 1984 「上草柳地区出土の細石刃について」『一般国道246郷（大和・厚木バイパス）地域内発掘報告書II』 大和市教育委員会
- 比田井 民子 1985 「先土器時代終末期における複合石器文化」『考古学雑誌 第70巻 第3号』 日本考古学会
- 西井幸雄 1986 『中砂遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第60集
- 比田井 民子 1987 「(研究ノート)関東 細石器遺跡 再考」『東京都埋蔵文化財センター 研究論集 VI』 東京都埋蔵文化財センター
- 西井幸雄 1988 「関東地方細石器文化小考」『転機 2号』
- 諏訪間 順 1988 「相模野台地における先土器時代石器群について一層位的出土例の検討による石器群の段階的把握一」『神奈川考古 第24号』 神奈川考古同人会
- 砂田佳弘 1988 「相模野細石器 その発生と発展にむけて」『神奈川考古 第24号』 神奈川考古同人会
- 堤 隆 1988 「相模野台地の細石刃核」『大和市史研究 第13号』 大和市役場
- 田村 隆 1989 『小中台(2)遺跡・新掘込遺跡・馬場遺跡』 千葉県文化財センター調査報告書 第159集
- 堤 隆 1991 「相模野台地における石器装備の構造」『大和市史研究 第17号』 大和市役所
- 長崎潤一 1991 『お伊勢山遺跡の調査 第2部旧石器時代編』 早稲田大学
- 佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学 大学院紀要 第29号』 法政大学
- 岡本健一 1993 『谷津・二反田・下向山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第131集
- 栗島義明 1993 「湧別技法の波及一削片系と在地系の細石刃核について一」『土曜考古 第17号』 土曜考古学研究会
- 橋本勝雄 1993 「略説・日本細石器文化研究の現状と課題」『史観 第24号』 史観同人
- 砂田佳弘 1993 「細石器の出現一相模野の検証一」『細石刃文化研究の新たな展開』 佐久考古学会
- 諏訪間 順 1993 「相模野台地における細石刃石器群と尖頭器」『細石刃文化研究の新たな展開』 佐久考古学会

付 編

鉤物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

1. 遺跡付近の地形

2. 調査区の地形

3. 分析方法

4. 試料

5. 分析結果

(1) 第I地点

a) テフラ分析

b) 火山ガラス比

(2) 第2地点

重鉤物分析

火山ガラス比

6. 層序対比

(1) 第I地点

(2) 第II地点

7. 遺跡付近の地形変遷

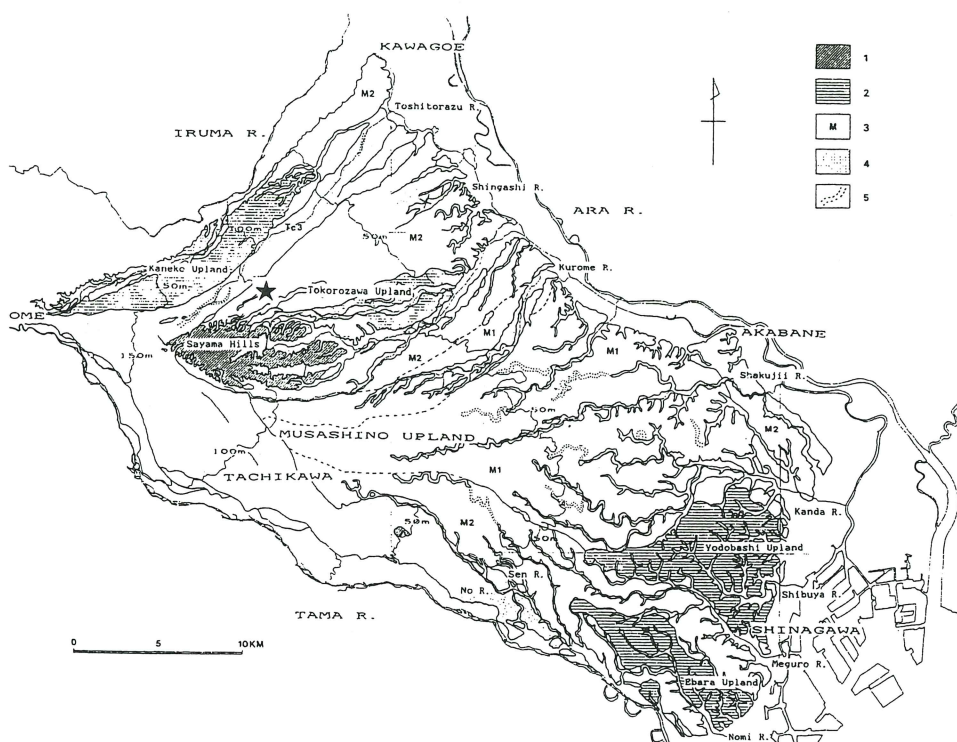
はじめに

清橋遺跡は、武蔵野台地の北部を構成する大井台とよばれる台地の西南部に位置する。大井台は、不老川の谷で北を限られ、南は狭山丘陵、所沢台、柳瀬川に限られ、東は荒川低地により限られており（堀口,1986）、狭い扇形を呈する台地である。この扇形の地形をほぼ2分するように、扇頂付近から先端に向かっておよそ北東方向に砂川堀が流れている。清橋遺跡は、台地上および砂川堀の谷の支谷の斜面にかけて立地している遺跡である。砂川堀流域では、これまでに右岸側に中砂遺跡や砂川遺跡などの旧石器時代遺跡が濃密に分布することが知られている。今回の発掘調査では、斜面部の黒ボク土層からローム層への漸移層付近より細石刃核・細石刃を含むブロックが検出され、本地域で出土例に乏しい細石器文化の一端が明らかとなった。

今回の分析調査は、本遺跡出土細石器の年代的位置づけを明らかにすることを目的として、調査区内に認められた地層の層序を確立するものである。

1 遺跡付近の地形

武蔵野台地は、古多摩川の形成した扇状地であり、扇状地の形成過程における地域的な離水時期の違いにより段丘が形成されて、武蔵野面や立川面といった地形面に区分されている。本遺跡の位置は、この扇状地の扇頂付近に相当する。遺跡の位置する大井台は、堀口（1986）では武蔵野段丘II面に対比され、地形面を構成する武蔵野礫層の上位に10～20cmのローム層を経てTP（東京軽石層）が挟まれていると記載されている。また、久保（1988）では、遺跡付近の大井台の形成時期はおよそ6万年前のM2面に対比されている。同著に基づけば、遺跡付近の大井台周辺の地形は、およそ次のように説明される。大井台の北側に広がる一段低い不老川段丘は、立川面の中でも最も新しい約1.5万年前に形成されたTc3面に対比され、大井台の南側の狭山丘陵縁辺に分布する所沢台は、大井台より一段高い下末吉面に対比されている（久保, 1988）。下末吉面の形成年代は、一般に約13



(久保(1988)を引用。★が遺跡の位置。1.丘陵 2.下末吉面 3.武蔵野面 4.立川面 5.浅谷)

図1 遺跡の位置

万年前と考えられている。また、砂川堀沿いの低い地形面は、久保(1988)では立川面に対比されている。その立川面の詳細な対比の記載はないが、不老川段丘と同じT c 3面であると考えられる。

以上の記載から、遺跡の調査区の中で、大井台に相当する高い台地の部分は約6万年前以降扇状地礫層を形成するような河川の洪水を受けることがなくなったことがわかる。一方、台地より低い部分は、約6万年前以降も河川の影響下にあったために谷地形が残ったものと考えられる。この低い部分がいつ頃から河川の影響を受けなくなったかを知るためには、この部分に堆積している風成のローム層の堆積年代を調べる必要がある。これについては、本分析結果をもとに後述する。

2 調査区の層序

調査区は、およそ北西―南東方向に道路幅で設定されており、北西側の台地および台地斜面部分と南東側の低地部分とに2分される。低地部分の地層断面は、南東側の調査区の北西部(第Ⅰ地点とする)において作成され、台地部分の地層断面は、北西側の調査区の中ほどの北壁(第Ⅱ地点とする)において作成された。以下、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団鈴木氏により分層された層序を各地点ごとに記載する。なお、試料採取は当社技師が行った。

・第Ⅰ地点(台地部)

台地上に堆積するローム層の断面が作成された。分層は、地層断面から観察される色調や質感、

碎屑物の状況などを基準として鈴木氏により行われたものであるが、特に地層名が付されていないので、ここで便宜的に1～9層までの地層名をつける。1層は現地表を構成する耕作土層、2層の漸移層を経て下位にローム層が認められている。3層は、発掘担当者によりローム層最上部のソフトローム層とされた層であり、その下位の4層は、ハードローム層とされている。その下位に順に5層、6層、7層、8層、9層が分層されている。このうち、5層と7層は黒色帯とされている。以上の堆積物を採取した位置を、柱状図にして図3に示す。

・第II地点（低地部）

上位より1層～8層までの分層がされている。1層は、現地表を構成する表土で黒色を呈する火山灰土いわゆる黒ボク土層である。2層は茶褐色土、3層は暗褐色土とされているが、これも黒ボク土層である。その下位の4層の漸移層を経て、5層の暗黄褐色土、6層の明黄褐色土、7層の暗黄褐色土が認められている。これらの層も火山灰土からなり、いわゆるローム層である。5層・6層は、いわゆるソフトロームで、6層には黄白色粘土が含まれる。また、7層は他の層に比べて砂質である。8層は砂礫層である。以上の堆積物を採取した位置を、柱状図にして図2に示す。

3 分析方法

一般に、地層の対比には指標テフラを見だし、それを鍵層として用いる方法が有効である。武蔵野台地の黒ボク土層中には、完新世に噴出した富士山や浅間火山を給源とするテフラが堆積している可能性があるが、武蔵野台地はどちらの火山からも遠いため、テフラを構成する碎屑物の粒径は小さくなる。そのため、それらのテフラは土壤中に混交してしまい、地層断面中にテフラ層として認められない場合が多い。このような黒ボク土層中のテフラを分析により検出し、その降灰層準を推定することで黒ボク土層の対比を試みる。

武蔵野台地の立川ローム層については、特に重要な指標テフラとしてUGとATがある。UGは、立川ローム最上部ガラス質火山灰（山崎，1978）というテフラで、細粒の中間型および軽石型火山ガラスを主体とするテフラとして認識されている。UGは浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており、その降灰年代は、約1.2万年前とされている（町田・新井，1992）。ATは、始良Tn火山灰（町田・新井，1976）というテフラで、細粒の無色透明のバブル型火山ガラスを主体とする。ATは、鹿児島県の始良カルデラを給源とし、今から約2.1～2.5万年前に噴出した（町田・新井，1992）と考えられている。UG、ATともにローム層中では肉眼で認められることは少なく、土壤中に混交するこれらのテフラに由来する火山ガラスの産状を調べることで、降灰層準を推定している。さらに、ローム層の対比には、指標テフラに加えて重鉱物組成の層位的変化を合わせて対比の鍵に用いる方法が非常に有効である。

以上のことから、第II地点では、黒ボク土層と考えられる2層と3層については、テフラ分析を行い、UGおよびATの降灰層準が推定される3層最下部以下の層については火山ガラスの産状を調べる（以下火山ガラス比分析とよぶ）。また、第I地点では、立川ローム層に対比されると考えられるので、重鉱物分析と火山ガラス比分析を行う。各分析方法の処理手順は、次に示す通りである。

・テフラ分析

本遺跡の黒ボク土層中に含まれていると考えられるテフラを構成する碎屑物は、主に極細砂以上の碎屑物であるから、試料から泥分を取り除いて観察する必要がある。試料は、適量を蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を実体顕微鏡下で観察、軽石・スコリア・火山ガラスの特徴や含まれる鉱物結晶などを調べる。

・重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm—1/8mmの砂分をポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

・火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を数え、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

4 試料

試料は、両地点とも厚さ5cmで垂直方向に連続的に採取した。台地部の第Ⅰ地点では、2層から9層上部まで、上位より試料番号1～38までの38点を採取した。低地部の第Ⅱ地点では、2層下部より7層最下部まで、上位より試料番号1～36までの36点を採取した。

第Ⅰ地点では、試料番号2～14までの偶数番号の試料と試料番号15～25までの奇数番号の試料および試料番号28と30の計15点を層界を考慮しながら選択した。

第Ⅱ地点では、テフラ分析に試料番号1～12までの奇数番号の試料と試料番号10および12の計8点を選択し、火山ガラス比分析に試料番号13～22の全点と試料番号24、26、27、31、35の計15点を選択した。3層下部から5層上部にかけて選択した試料の数が多いのは、この層準付近にUGの降灰層準が推定されるからである。

5 分析結果

（1）第Ⅱ地点（表1、表2、図3）

a) テフラ分析

軽石と火山ガラスが認められ、スコリアは全く認められなかった。軽石は、試料番号1に含まれ、径約1mmで淡灰褐色を呈し、発泡はやや不良である。この軽石は、その特徴から浅間Bテフラ（As—B：A.D.1108年（天仁元年）噴出；新井，1979）に由来すると考えられる。ただし、本地点

における軽石の産状は、A s—Bの降灰層準を推定し得るものではない。

火山ガラスは、試料番号1～5では微量含まれ、試料番号7～12では少量含まれる。火山ガラスの形態は、バブル型と中間型が多く、試料番号9以下では軽石型も含まれる。このうちバブル型には、極めて微量の褐色の火山ガラスが含まれるが、他のものは無色透明である。その産出層位から、これらの火山ガラスのうち、バブル型のものはA Tに由来すると考えられ、中間型や軽石型のものはU Gに由来すると考えられる。ただし、火山ガラスの産状から、これらのテフラの降灰層準は、試料番号12より下位にあると考えられる。また、褐色のバブル型火山ガラスは、今から約6300年前に九州南方の鬼界カルデラから噴出した鬼界—アカホヤ火山灰（K—A h：町田・新井，1978）に由来する可能性が高い。しかし、その産状は散在的で降灰層準を推定することはできない。

b) 火山ガラス比

中間型火山ガラスの特徴的な産状が認められる。中間型火山ガラスは、試料番号19以上に比較的多く含まれ、試料番号20より下位に向かって減少し試料番号26では微量になる。この中間型火山ガラスは、その産出層準と形態から、U Gに由来し、本地点における降灰層準は、試料番号19採取層準すなわち5層最上部付近と考えられる。

中間型火山ガラスの他に、微量のバブル型と軽石型が認められる。このうち軽石型はU Gに由来するものであるが、バブル型はA Tに由来するものであろう。しかし、5～7層の間にA Tの降灰層準は認められない。

(2) 第I地点（表1、図2）

a) 重鉱物分析

カンラン石は、試料番号4～6、21、25に量比の極大層準が認められ、試料番号12、23に量比の極小層準が認められる。斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、カンラン石とほぼ逆の傾向を示す。この中で特に試料番号12の両輝石の極大は指標となる。角閃石は、試料中にほとんど含まれない。また、不透明鉱物は、特に指標となるような量比の変化傾向は読み取れない。

表1 第I地点試料テフラ分析結果

層名	試料 番号	スコリア 量 色調 発泡度	軽石 量 色調 発泡度	火山ガラス 量 色調 形態
2	1	—	＋ 淡褐 やや不良	＋ 無色>>褐色 bw, md
3	3	—	—	＋ 無色 bw, md
	5	—	—	＋ 無色>>褐色 bw, md
	7	—	—	＋＋ 無色 bw, md,
	9	—	—	＋＋＋ 無色 bw, md, pm
	10	—	—	＋＋ 無色 bw, md, pm
	11	—	—	＋＋ 無色 bw, md, pm
	12	—	—	＋＋＋ 無色 bw, md, pm

凡例 —：含まれない。＋：微量。＋＋：少量。＋＋＋：中量。＋＋＋＋：多量。

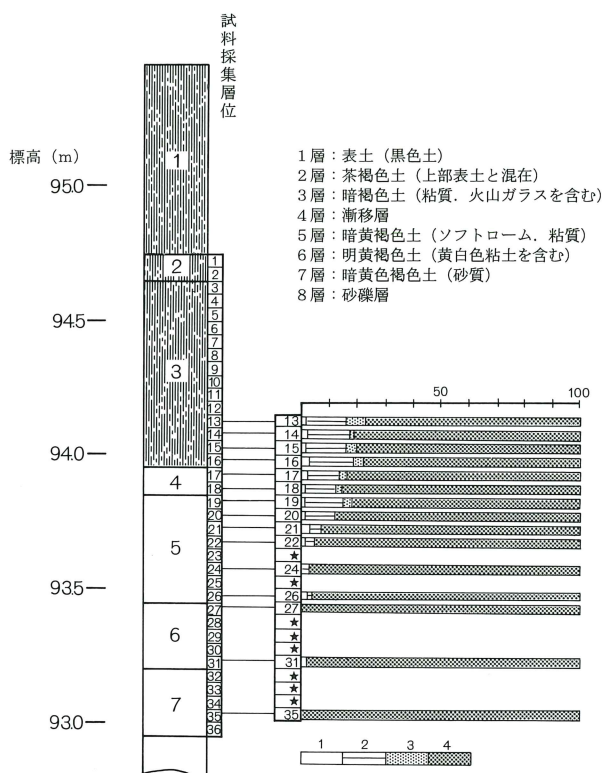
b w：バブル型。 m d：中間型。 p m：軽石型。

b) 火山ガラス比

中間型火山ガラスとバブル型火山ガラスの特徴的な産状が認められる。中間型火山ガラスは、試料番号2～10に多く、下位に向かって減少し、試料番号12以下では微量しか含まれない。試料番号

表2 第I地点試料火山ガラス比

試料番号	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	計数粒数
13	4	37	15	250
14	5	39	4	250
15	4	37	8	250
16	7	39	9	250
17	5	29	6	250
18	3	28	4	250
19	4	32	9	250
20	4	26	2	250
21	8	10	1	250
22	4	8	0	250
24	2	6	0	250
26	5	4	1	250
27	1	1	0	250
31	5	0	0	250
35	2	0	0	250

図2 第II地点試料火山ガラス比ダイアグラム
(1.バブル型 2.中間型 3.軽石型 4.その他)

2～6では、少量の軽石型火山ガラスも伴う。この産状から、中間型火山ガラスおよび軽石型火山ガラスは、UGに由来すると考えられ、その降灰層準は、試料番号4～6採取層準付近すなわちIII層上部付近と考えられる。バブル型火山ガラスは、下位より見て試料番号25から17にかけて増加し、それより上位では減少する。このバブル型火山ガラスは、その産出層準と形態からATに由来すると考えられる。その降灰層準は、下位からみて急増する試料番号19付近と考えられる。

6 層序対比

(1) 第II地点（低地部）

2層および3層は、指標テフラに由来する碎屑物を検出することができたが、降灰層準を推定できるほどの産状ではなかったことから、層中に時間指標を設定することはできない。5層最上部がUGの降灰層準と考えられることから、5層は、武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるIII層にほぼ対比される。したがって、4層以上の層は、約1.2万年前以降の地層といえる。また、本遺跡で検出された細石器ブロックの層準は、UG降灰層準のほぼ直上であるといえることから、その年代は、約1.2万年前よりは新しいか、その年代にほぼ近いと考えてもよい。6層および7層は、ATの降灰層準が検出されなかったことから、AT降灰以降UG降灰以前の地層である。したがって、層位的には、IV層～V層に対比されると考えられる。

表3 第I地点試料重鉱物組成および火山ガラス比

試料 番号	カン ラン 石	斜 方 輝 石	単 斜 輝 石	角 閃 石	不 透 明 鉱 物	そ 他	重 鉱 物 同 定 粒 数	バ ブル 型 火 山 ガ ラ ス	中 間 型 火 山 ガ ラ ス	軽 石 型 火 山 ガ ラ ス	そ 他	計 数 粒 数
2	96	99	22	1	21	11	250	4	33	14	199	250
4	116	65	22	1	27	19	250	15	32	14	189	250
6	115	75	19	1	15	25	250	26	32	11	181	250
8	104	89	22	0	13	22	250	52	18	5	175	250
10	93	104	29	0	16	8	250	40	21	9	180	250
12	73	110	39	0	23	5	250	106	1	3	140	250
14	90	102	32	2	15	9	250	165	5	0	80	250
15	84	87	47	0	24	8	250	160	5	4	81	250
17	107	90	34	0	9	10	250	197	4	3	46	250
19	132	70	24	0	8	16	250	186	2	0	62	250
21	167	55	11	0	3	14	250	57	1	4	188	250
23	142	61	19	0	11	17	250	50	6	1	193	250
25	156	54	16	1	8	15	250	8	1	0	241	250
28	150	69	16	1	3	11	250	0	1	1	248	250
30	124	58	31	0	13	24	250	0	3	1	246	250

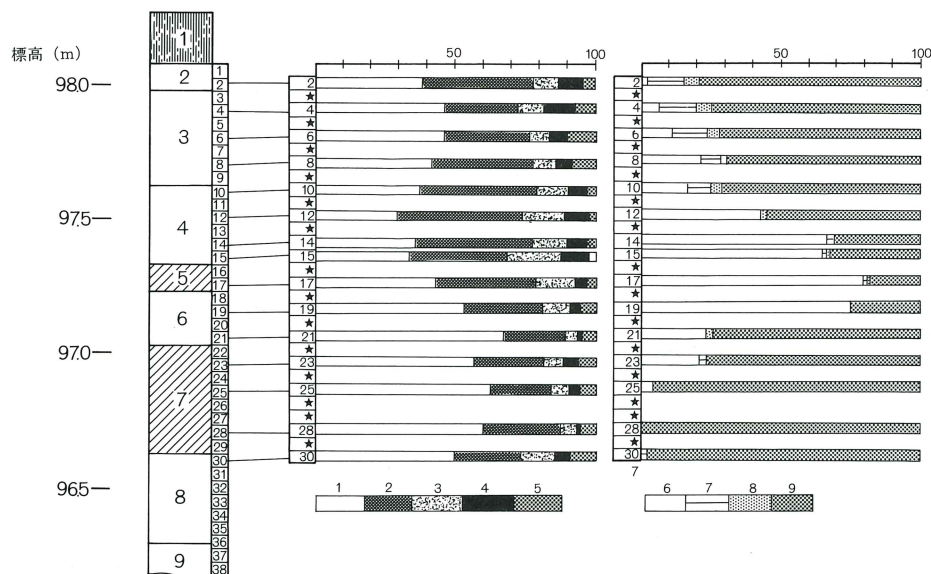


図3 第I地点試料重鉱物組成および火山ガラス比ダイアグラム

(1.カンラン石 2.斜方輝石 3.単斜輝石 4.不透明鉱物 5.その他
6.バブル型 7.中間型 8.軽石型 9.その他)

(2) 第I地点 (台地部)

3層上部がUGの降灰層準と考えられることから、3層は、III層にほぼ対比される。また、試料番号12の両輝石の極大は、小林ほか (1971) の羽鳥の分析例をはじめとして当社による多くの分析例にも共通してみられるV層、すなわち立川ローム層第1暗色帯 (BB I) 上限付近の輝石の極大にほぼ対比されることが考えられる。したがって、4層の上半部はIV層に対比され、4層の下半部はV層に対比される。本地点で黒色帯とされた5層は、V層の下半部に対比されることになる。

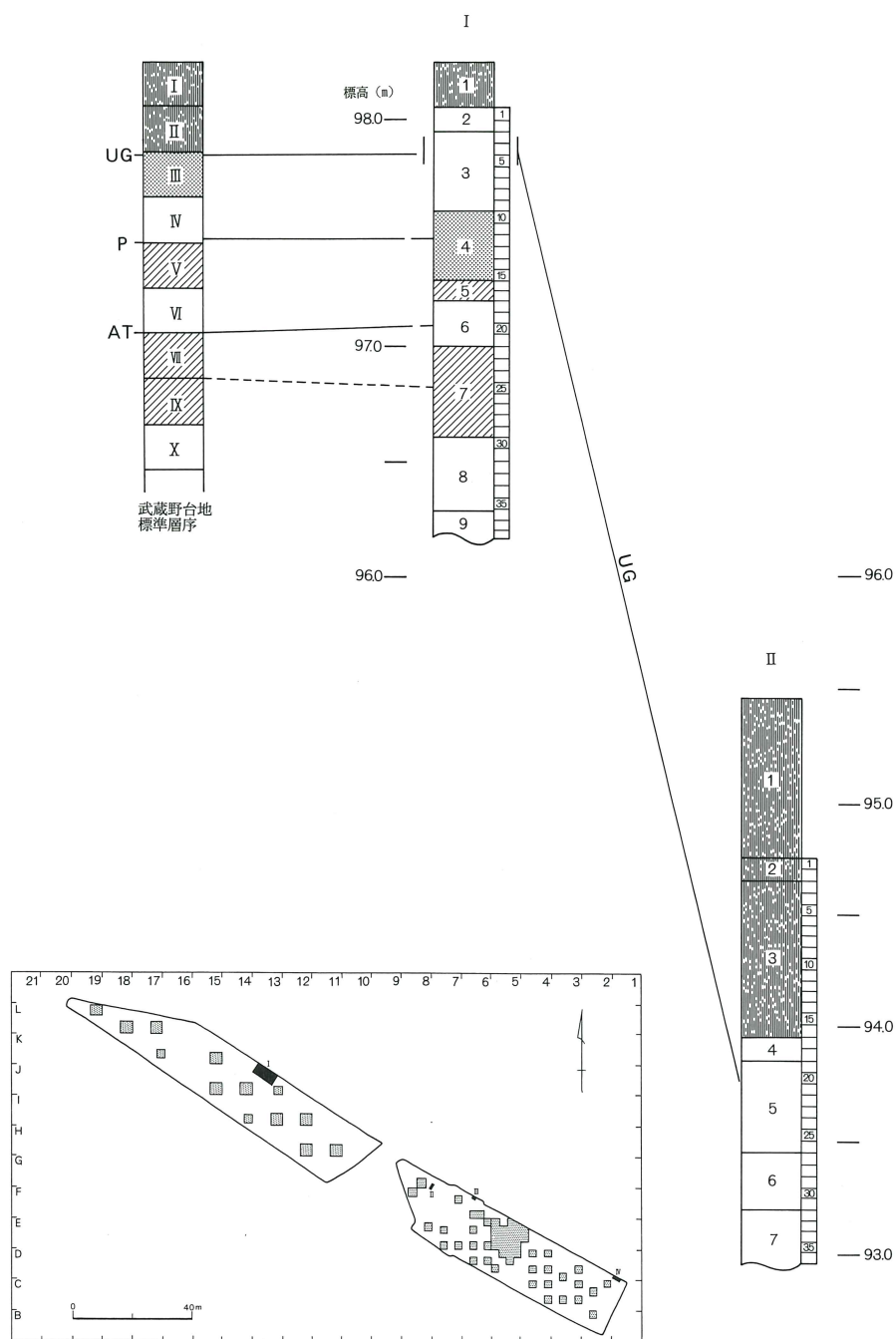


図4 第I地点、第II地点層序対比図
(UG:CG降層準、P:輝石の極大層。AT:AT降灰層準。)

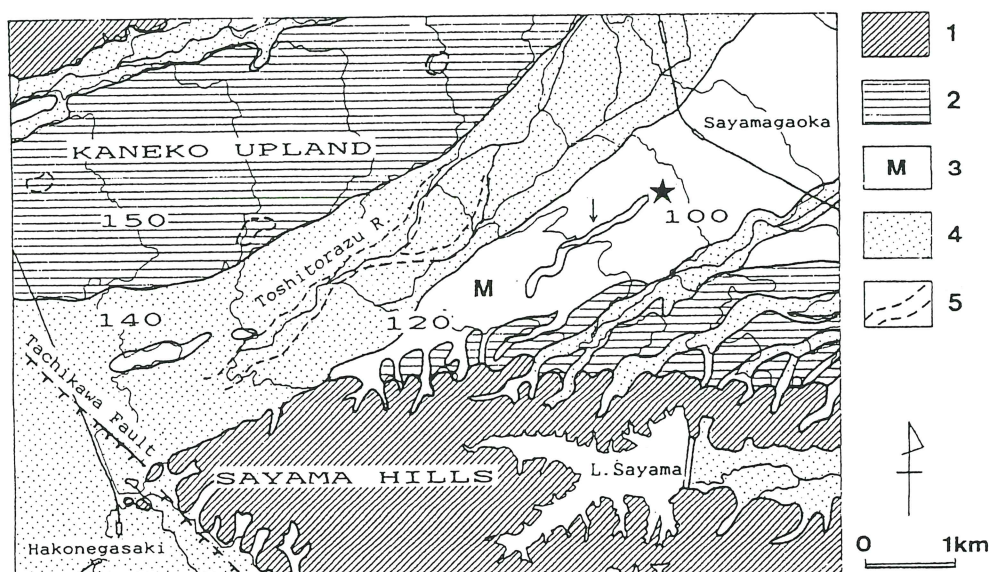


図5 遺跡付近の地形

(久保(1988)を引用。★が遺跡の位置。↓は狭小な谷。1.丘陵
2.下末吉面 3.武蔵野面 4.立川面 5.浅谷)

A Tの降灰層準が、6層上部の試料番号19付近に推定されることから、6層は、ほぼⅦ層に対比されると考えられる。ただし、当社のこれまでの分析例では、A Tの降灰層準は、Ⅶ層すなわち立川ローム層第2暗色帯上部(B B II u)の直上または上限に推定されることが多かった。また、試料番号21に認められたカンラン石の極大も、同様の層準付近に認められることが多い。したがって、本地点の6層下部は、Ⅶ層最上部に対比される可能性がある。本地点7層の黒色帯は、B B IIであるⅦ層およびⅨ層にほぼ対比される。この層位の中で、試料番号25に認められたカンラン石の極大は、これまでの分析から見出されたⅦ層とⅨ層の境界付近を示す指標に対比されると考えられる。したがって、本地点の7層のうち、試料番号24以上がⅦ層に対比され、それより下位の7層は、Ⅸ層に対比される可能性が高い。本地点の黒色帯の下位の層である8層は、層位的にⅩ層に対比される。

以上の対比結果を、図4に示す。

7. 遺跡付近の地形変遷

調査区内に認められた砂川堀の支谷と考えられる低地の地形は、おそらく久保(1988)に示された狭小な谷(図5矢印)に続くものと考えられる。この図によれば、谷の方向は、砂川堀や不老川の谷の方向とほぼ平行していることから、扇状地上を流れた河川の流路跡であると考えられる。第1地点の層序から、この谷内の低地が離水したのはA T降灰以降であり、U G降灰よりもかなり前から、既に風成のローム層が形成されていたことがわかる。不老川の幅広い谷の地形面が、約1.5万年前に離水したT c 3面に対比されている(久保,1988)ことを考慮すれば、本遺跡の低地の地形面

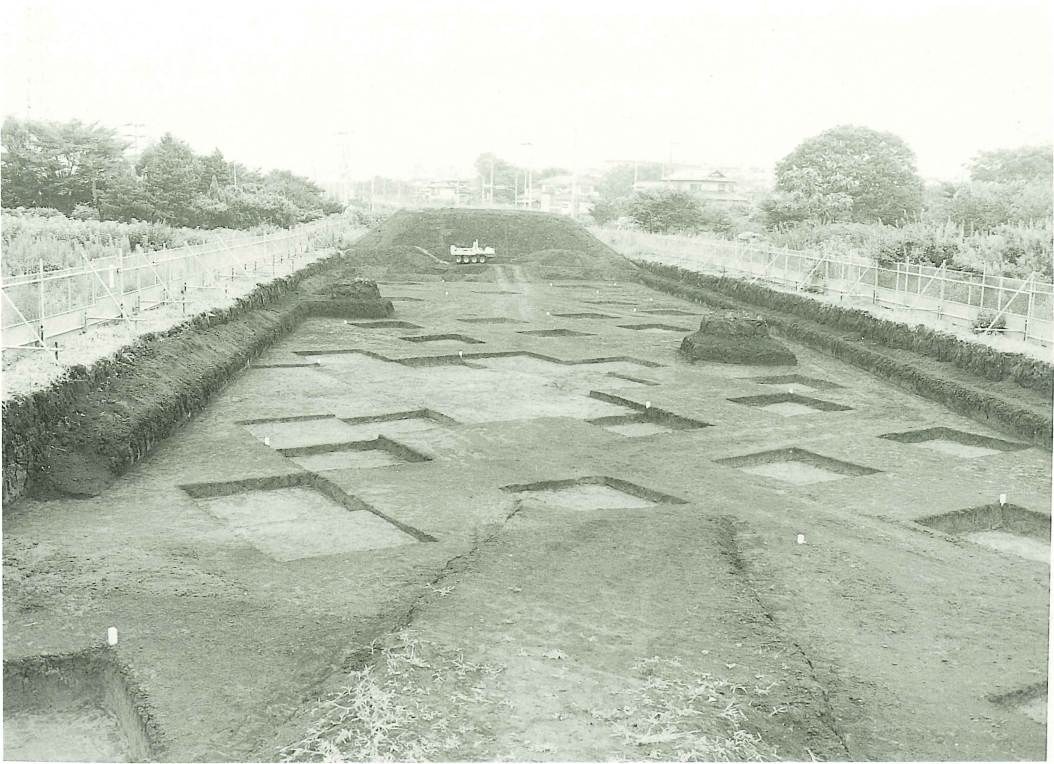
も T c 3 面に対比される可能性が高い。

したがって、例えば武蔵野台地の先土器時代遺跡が多く認められている A T 降灰前後の頃には、本遺跡の台地部分は、地形的には今日とほぼ同様の台地となっていたが、低地部分は、河川が流れており、砂礫の露出した河原の景観を呈していたと考えられる。そして、本遺跡で細石器のブロックが残された頃は、低地も既に乾陸化して長い年月が経過しており、火山灰土に覆われた地表が広がっていたと考えられる。

文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層。考古学ジャーナル，157，p.41-52。
- 堀口万吉（1986）II 埼玉県地形と地質。新編埼玉県史別編3自然，p. 7-74，埼玉県。
- 小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男（1971）野川先土器時代遺跡の研究。第四紀研究，10，p.231-252。
- 久保純子（1988）相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の谷地形—。地理学評論，61，p.25-48。
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—。科学，46，p.339-347。
- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究，17，p.143-163。
- 町田 洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」。276p.，東大出版。
- 山崎晴雄（1978）立川断層とその第四紀後期の運動。第四紀研究，16，p.231-246。

写真図版



I 区 調査区全景



II 区 調査区全景



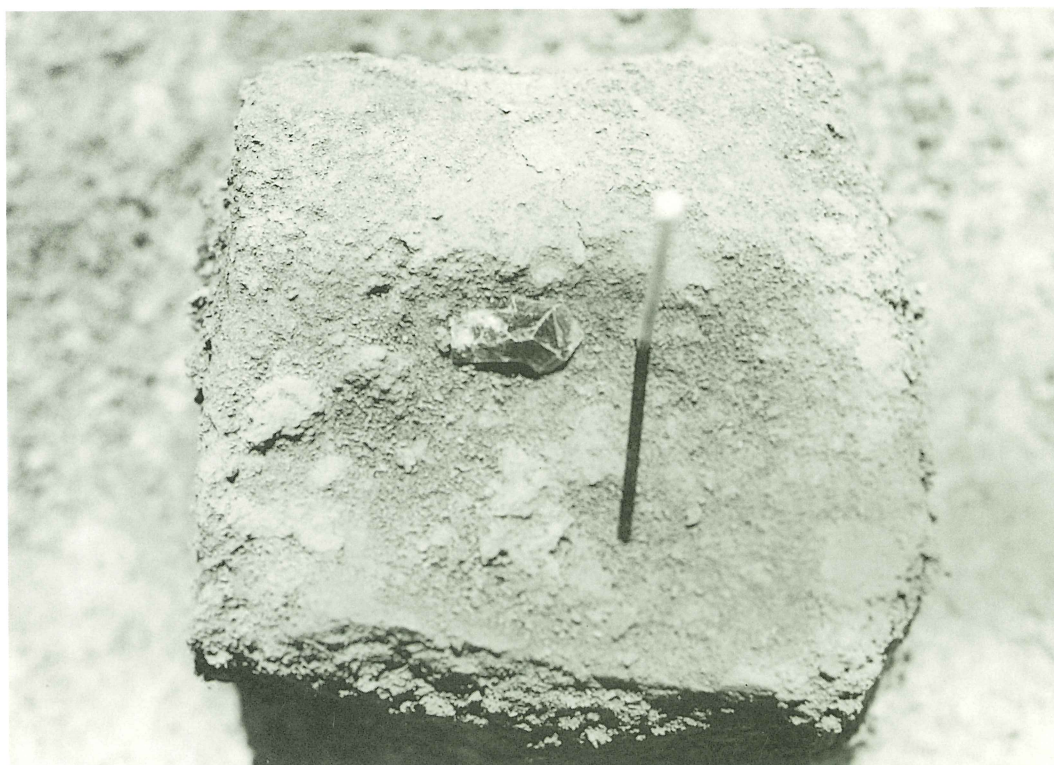
石器集中1 全景（南から）



石器集中1 全景（西から）



石器集中1 尖頭器出土状況



石器集中1 石器出土状況



I区 標準土層堆積状況



II区 標準土層堆積状況



第1号溝全景



第1号溝土層堆積状況

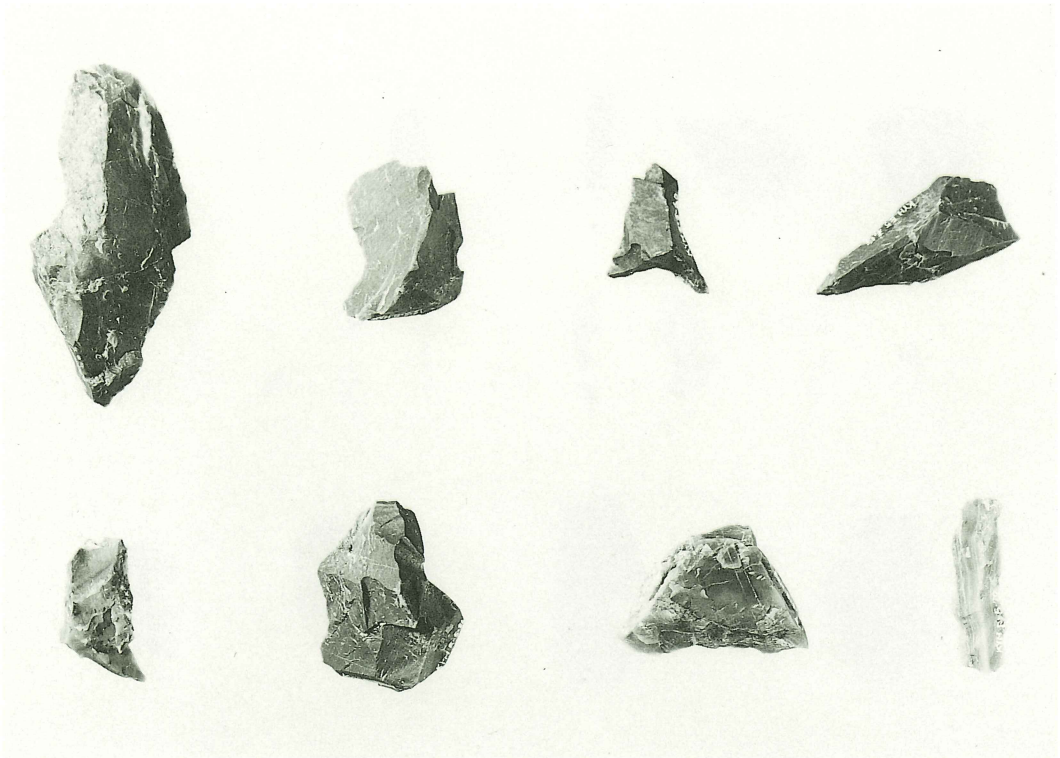
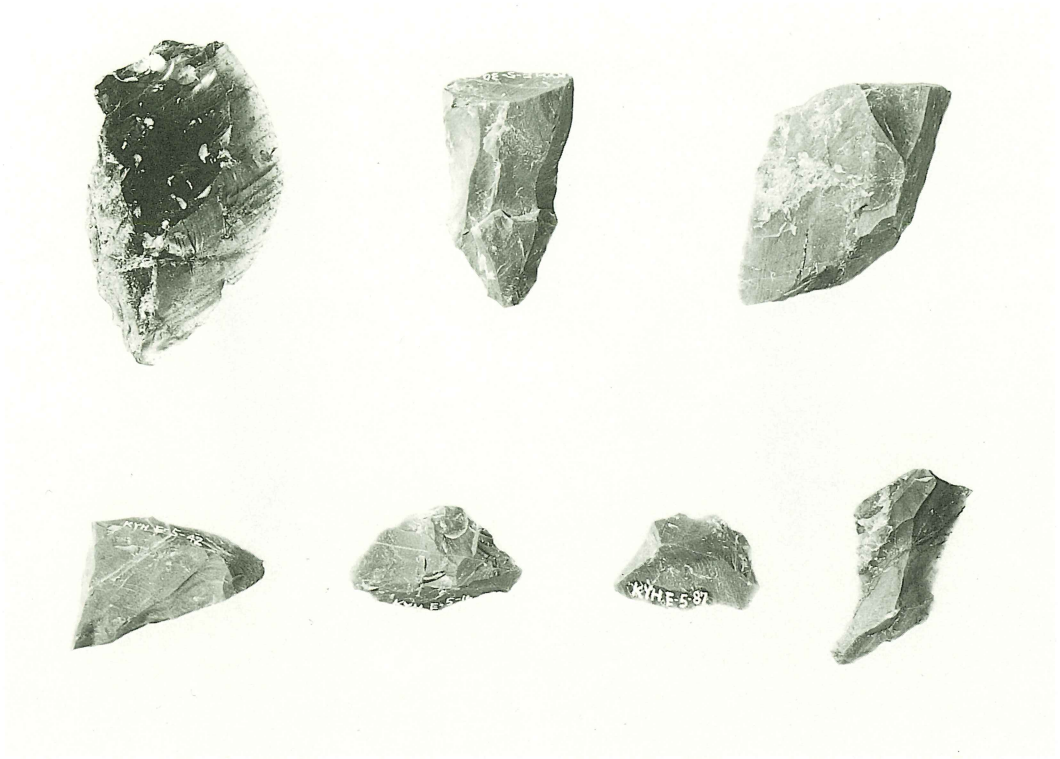


第2号溝全景

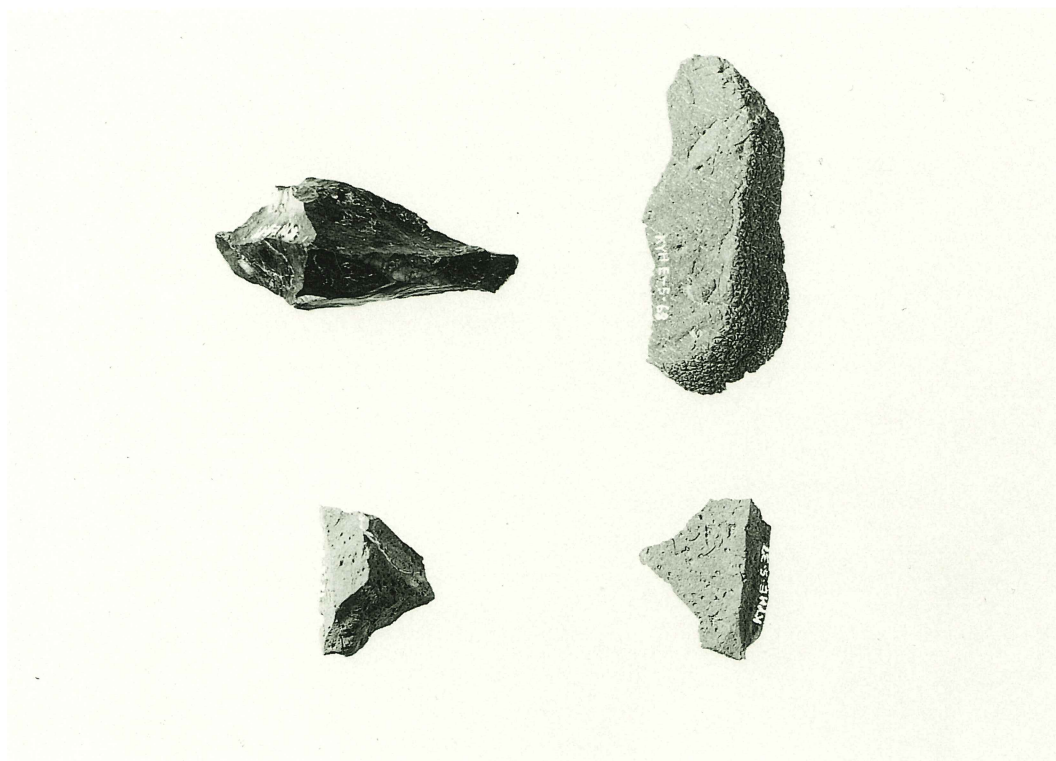
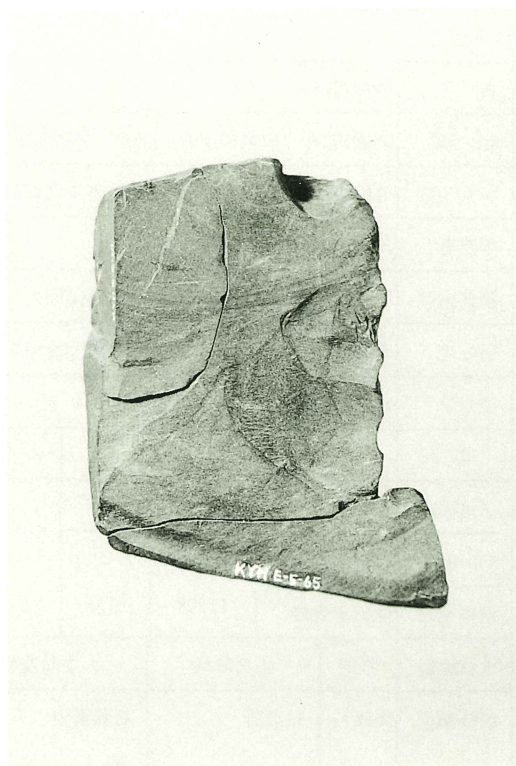
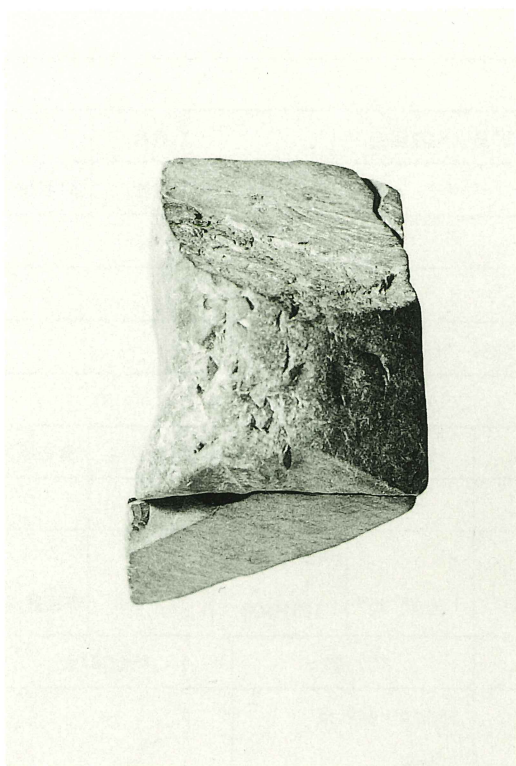


第2号溝土層堆積狀況





出土石器(2)



出土石器(3)

報告書抄録

フリガナ	キヨハシ イセキ							
書 名	清橋遺跡							
副 題	国道463号（旧県道所沢入間線）関係埋蔵文化財発掘調査報告						巻次	
シリーズ	財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						巻次	第142集
編集者	田中正夫、岡本健一、西井幸雄							
編集機関	財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884 TEL 0493-39-3955							
発行日	1994年（平成6年）3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡				(㎡)	
キヨハシイセキ	トコサヅリシ キタノ	11208	0123	35° 47' 44"	139° 25' 26"	19910401	7, 000	道路建設
清橋遺跡	所沢市北野					～19910903		
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
清橋遺跡	集落	先土器		石器集中 溝		細石核・細石刃 尖頭器		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第142集

清 橋 遺 跡

国道463号(旧県道所沢入間線)関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成6年3月24日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884

電話 (0493) 39-3955

印刷

望 月 印 刷 株 式 会 社